

小精廬日錄

四

大正九年第七月上浣起筆

特別
14
1919
330



176598
176597

不精なる日記

大正九年七月上瀬起書



○北条公春のくよる冬巻の北条春志を披いて見れば
 か手は入らざるや。切りのりも、ゆつとある某者
 と、こゝろのれ。抑も春山に、も終に登攀を
 得無くするや。腹食やると、精ひ入ん。以流の料
 目としてみる。このと嘉慶の時、十冊の内一
 冊の大部令を回ひある。雪松墨成と云
 家、後取のまゝ。画家の書画、傳ひある。こゝ一
 本を得た。いよいよ、け前年、復刻し、再版の筆
 巻のふをいれ、一ある中、フト、初掲をい

此、西目流ぬれ大命おき、序(後遊)を再版
 又、欠ぬれぬるかえり存して居る。日本實
 訓とよみ一冊のを得れ、これと古希を古名海
 の教訓を集めれば、その全部初又ひある、誰れ
 得る家、の心づくしく、其名の奉書紙を以て
 刷行してある所に、孰味がある。吾國地華
 ハ細川潤吉の遺著とひあるが、續々申後、各
 各三冊を得れ、初、初、初と多く坊百にあるが
 此の二行を初めを日、編んじ、漢文としてある
 が日本のおもむきを考へてお申の元、後、
 がある、細川とよみ人の晩年を自著と出版
 するを道楽とて思ひ、意の多く、刊

所物、うち、吾國音、流、る、り、刊、行、る、る、
 依、依、人、名、辞、者、と、よ、よ、後、へ、ら、る、を、得、れ、こ、ん、
 心、心、の、一、部、の、~~一、部、の、~~考、ひ、は、元、に、浦、法、の、こ、の、心、を
 の、此、年、出、版、し、ぬ、れ、ぬ、れ、ひ、ある、が、田、舎、出、版、し、
 坊、百、と、得、る、ん、ら、ぬ、心、を、日本、の、金、石、を、
 集、め、て、見、ぬ、い、と、よ、の、念、に、お、り、く、賢、ひ、集、め、る、
 が、神、護、寺、并、に、道、澄、寺、の、鐘、銃、の、振、を、流、帳
 に、装、潢、し、た、ぬ、京、都、と、ある、と、よ、購、ひ、入、れ、ぬ、
 又、又、其、者、産、か、特、に、揃、し、二、三、の、振、を、得、れ、即
 ち、天、馬、丸、平、墓、一、條、寺、塚、市、中、米、
三、毛、寺
 井、述、富、碑、三、毛、寺、
三、毛、寺
 皆、都、の、ある、碑、ひ、と、ある、ぬ、其、の、振、を、

このこと、餘り容易なる、大津、終歌、夜十ハ、
香とさふ肉も、忙、安、美、し、此の不、能、を、ある
か、誰、の、事、よ、う、さ、も、ん、が、う、う、く、執、ら、る、る、二、書、欠
け、て、あ、る、る、を、椿、岳、が、補、つ、て、あ、る、る、こ、の、お、お、し、こ、出、来、
て、居、る、復、元、を、今、み、終、つ、て、復、元、し、て、出、来、
出、来、に、あ、る、出、来、の、と、の、ひ、あ、る、二、書、精、註、十三、冊、こ
れ、の、餘、り、坊、に、無、い、者、の、あ、る、三、條、山、坊、上、寺、殿、に
紙、を、刻、つ、つ、う、く、執、ら、る、る、と、も、増、上、寺、殿、に
時、代、の、道、楽、は、あ、る、と、言、ふ、ま、じ、り、な、い、
復、元、を、今、み、一期、乃、ち、二期、な、り、や、う、こ、う、や、う、
一、二、三、の、一、二、三、の、期、に、入、る、都、合、に、あ、る、が、才、一、動
の、何、と、と、大、力、な、り、な、り、な、り、な、り、

二

を一通り申述べて見ませう。そも此の事業を思ひ立
ちました動機は應用木版の利用といふ事でありまし
た。近年珍書の刊行を企て、それを實行した人た
は幾人もありましたが、大抵は姑息な手段を採つた
ので、複製の目的を達してはゐません。例へば毛筆
謄寫版で複製を試みた人もあります。成程毛筆謄寫
版の技術は大きに進歩して参りました。けれども未
だやつと寫本代用程度に止まつてゐます。次に木版
とても熟練した彫工は次第に減るばかりですから、
並の木版で複製しますと、古朴の味ひを彫り崩して
全く現代式のものとする傾きがあります。私共はそ
れを遺憾に思つてゐました折柄、従來の化學的腐蝕
版に工夫を加へて所謂應用木版を案出した人があり
ました。で試に座右の漢籍の一部分を製版させて見
ましたところ、頗る精巧に出来上りました。是れな
らば木版に比べて出来も早く、製版料も遙かに減減
し得られる見込なので、早速複製に着手しました。
『會我扇八景』『剝野老』『高だち』『桃太郎』『億說年代
記』『文七一周忌』『仙人龍王威勢』『風流謠年代記』

の八種は此の製版法に依つたものであります。
然るに實地に當つて見ますと、古色を帯びた原本を
明瞭に寫真に映し出すことは中々困難です。で、『高
だち』の如きは高い料金を拂つて専門家に引寫しを
させ、『桃太郎』の如きは、一旦コロタイプに刷つた
ものを原稿として之に修正を加へ、更に應用木版を
製作した爲め、二重に製版料を要しました。その上
版面が硬過ぎて水墨を吸ひ込む力が無いので困りま
した。がインキ印刷では木版の特色たる軟味がな
くなりません。そこで、遂に『江戸名所百人一首』を始
め約二十種の刊本は純粹の木版を用ゐざるを得ない
事となりました。併しながら、最も老練な彫工と摺
工を選びましたから、出来榮は一回毎に益、精巧の域
に進みました。其代り

経費は次第に膨脹

して、いつの間にか豫算額の二倍以上となりました。
應用木版は粗密の別なく寸坪何程と云ふ慣例ですが
木版に至つては稚拙な刊本ほど其の摸刻が面倒で、

一葉數十圓を費したのがあります。それに、折わるくも物價の暴騰に逢ひましたので、和紙の價は二年前に比べると三四倍ともなり、摺代、製本代等も一般賃銀の引上げに準ずる事となりましたので困りました。

初めから印行部數を三百部に限つた爲めに多く廣告費を使つて新會員を募るやうな餘地は無いので、主として會員諸君の同情に訴へて其の紹介を待つか、同人諸氏の援助を煩はすか位の事で新募集の方法は甚だ行届かなかつたのです。爲めに、今以て二百六十八名に止まり而も其内から二十餘名の脱會者があつたので、現在だけの収入では經營頗る困難でした。けれども幸に豫定の期限におくれなくて、第一期を完成しましたのは此上もなく悦ばしく思ふ所であります。只若し物價の激變が無かつたならば四十種以上を發行し得たものと、それだけを残念に思ひます。

扱此複製に與つて方ある二人の功勞者は木版彫刻の大塚祐次氏と木版印刷の阿部鍋五郎氏であります。

明治初年の珍消印 (七)

第五十二圖は明治六年頃岩代國伊達郡桑折にて使用せるもの、第五十三圖は明治七年三月頃肥前國大村にて使用せるもの、第五十四圖は明治

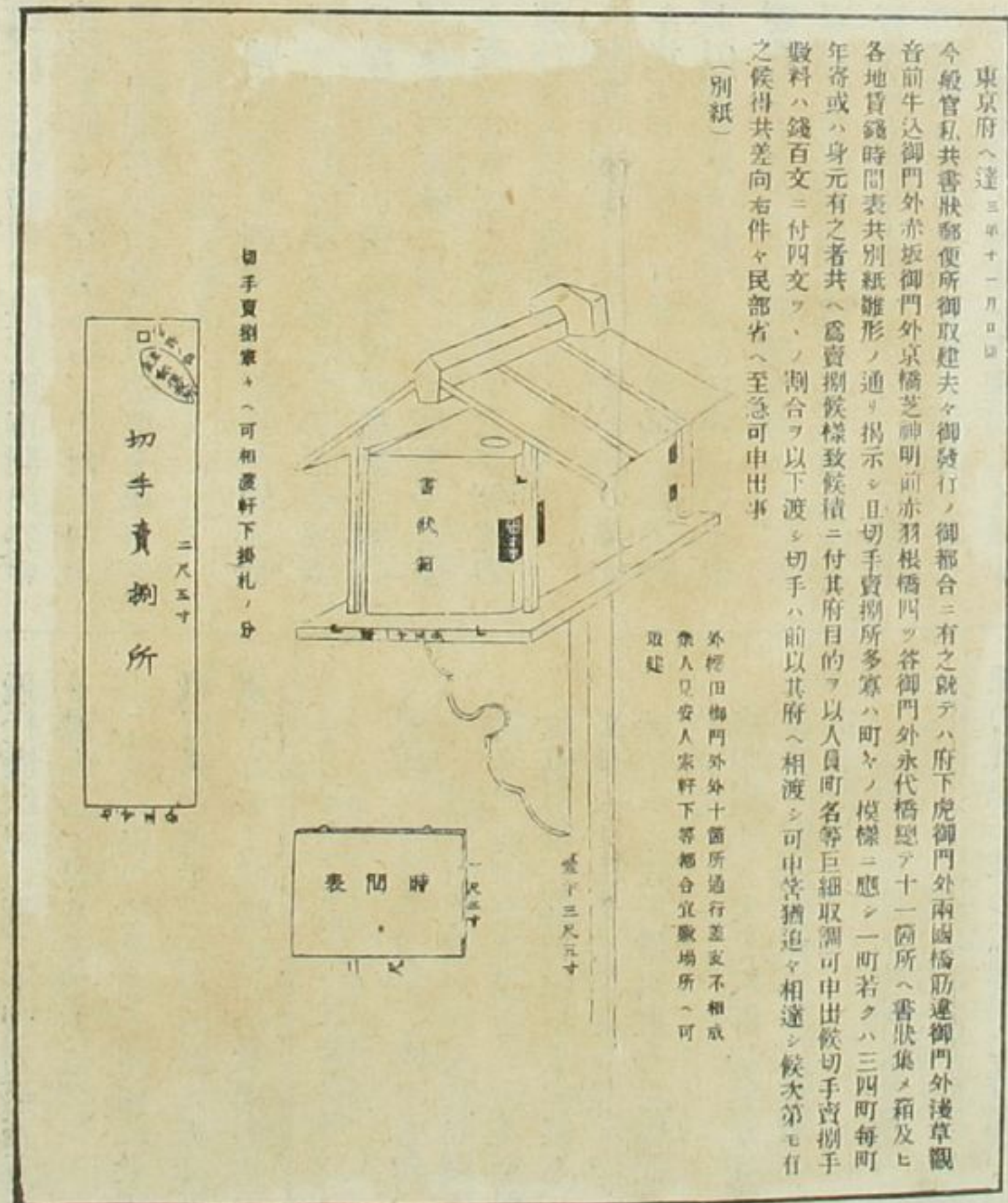


八年頃紀伊國串本にて使用せるもの、第五十五圖は明治七年頃羽後國平鹿郡角間川にて使用せるもの、第五十六圖は明治八年頃筑前國宇佐にて使

の郵便の古切手とを甚とるを次つて出さし、出さしとある方面とを郵便と云く、難後、の出放さんてゐる、そのゆゑに、言わぬの郵便の圓や、め次初年の消印の、中紙の圓、の切手を出してゐる、前此のの消印も、海を、海を、海を、此等、の圓と入るべきであつたと思つた

十二

りな寫の圖の函便郵の初最國帝本日大



東京府へ達 三年十一月十日
 今般官共書狀郵便所御取建夫、御發行、御都合ニ有之說テハ府下虎御門外兩國橋助運御門外淺草觀音前牛込御門外赤坂御門外京橋芝御門前赤坂根橋四ヶ所御門外永代橋門外十一箇所へ書狀集メ箱及ヒ各地貨物時間表共別紙形ノ通、揭示。且切手賣捌所多草ハ町々ノ模様ニ應シ一町若クハ三四町毎町年寄或ハ身元有之者共へ為賣捌候様致候請ニ付其府目的ヲ以人員町名等巨細取調可申出候切手賣捌手費料ハ錢百文ニ付四文ヲ、割合ア以下渡シ切手ハ前以其府へ相渡シ可申候猶追々相違ノ候本第モ有之候得共差向右件々民部省へ至急可申出申事
 (別紙)
 外標田橋門外外十箇所通行差支不候取建
 兼人員安人案軒下等都合其敷場所へ可

文學博士吉田君墓表
 君名東，字震卿，通稱東伍，越後蒲原
 郡人。越後州大物饒，名人輩起，君闡
 究史學，蔚然成宗。以振鐸東京，著書
 等身，尚援筆不輟。大正七年戊午，一
 月廿二日，暴病卒，年五十有五。歸葬
 于鄉里，弟高橋義彦，欲表其墓，來徵
 予文。嗚呼！予頽老，尚可忍記其事也。
 夫君本旗野氏，家素好學，幼精敏，不

玉印鳩鈕

泮陰侯



郁文書寫

印

壽山白



庚申六月於燕京所獲

嬉戲就外傳于新潟、習英語三年、父
乃以漢籍厭飲之、經史百家觸手成
誦、汎濫乎詞章、無他嗜好、惟樂酒、翫
詩歌自適、稍長、提耳兒童、服暮年兵
役、偶遊東京、見泰西科學盛興、嘆曰、
詞章殆將誤我身矣、自是專意史學、
出則就古址、檢遺物、居則閱內外雜
誌、隨覽隨鈔、讀那珂氏紀年考、謂古

史可統紀也、乃起、拜伊勢神宮、遂航
北海道、跋涉山野、伶俜自苦、人無知其
何意、歲餘而歸、復治裝赴東京、實
明治辛卯十二月也、當是時、大學創
國史科、史論方競、同郡市島謙吉、介
君讀賣新聞、當史評、稱落後生、揭其
見解、所論新警、脫窠臼、辨難、譁然、人
皆矻矻、我獨有餘、名聲頓揚、然榮名
利祿非所求、僑居陋室、飽暖纔給、澹

如也。悅大都文獻。沒頭圖籍古器。自不知倦。踰年日韓古史斷成。識者悚然。推重之。繼將述近代史。會計清師興。乃起就戎。為軍艦橋立記者。轉威海衛澎湖島。犯砲火。執鉛槧。意氣方壯。投鏡浩然。欲大有所著述。從祖父少川弘。嘗修國邑志。就緒而沒。明治初。朝廷修地誌。亦不見功。君曰。地名

猶不改。安知古今之變遷乎。乃決意撰地名辭書。以導初步云爾。地誌率蕪雜而多欽陷。予恐非獨力所辦。君安然曰。吾業固如是。徐披荆棘而進耳。既定體例。餘暇從事之。在外為早稻田大學教授。史學循循不厭。在家搦筆且讀且記。有堅坐終日不出室。倦則喚酒小飲。陶然而寢。十有三年而告成。知友開宴咸慶之。見其稿盡

所手記皆色然而驚。君笑曰：一千二
百萬言，酒中成之。君貌朴而氣厚，寡
默而慤實，明敏強記，文心如抽繭，頃
刻數千言，故篇什雖多，一氣貫注，無
錯誤，其業固勉。遊刃猶有餘地，旁摭
歷史地理，證實能樂起源，多所闡發。
校世阿彌禪竹遺集，并宣曲集公之。

其精力如此，已酉歲授博士。
博士學 博士先

十二卷

是大學謹議，七博士聯袂辭職。君慨
然曰：法家尚為之，公道正理在我文
學，曾無一人能明之者乎？乃遂初志，
著倒叙日本史，其編次詳今略古，陳
近今時勢之變化，成敗之迹，指切是
非，持正不撓。論古必言所自信，不為
苟合妄隨。博辯卓異，有威武不屈之
概，極是本領之文。尋將撰國史百科
辭書，會早稻田校訂擾，推君登革事。

願

毀劇、休養于下総鉦子、俄發病、一夕不起。君父信有第三子、早喪、怙依佐兄公綽、怡和服勞、孚于親戚、娶吉田氏、嗣其家、生二男四女、長男春太郎、季冬藏、長女適人、餘未嫁、藏柩于小合先塋次、就鉦子琴平山建石表終焉。

大正九年庚申一月文學博士久

米邦武敬撰

此墓表昨年久米博士に特に請ふて其の撰を得たるもの、博士得意の文也、但し小瑕疵あり、請ふて改削を期すとす。

大正九年七月八日記

○少林淡海山の紙本一幅を辨め、少林ハ紙後の傳也、及石に刻し、其の北幅首款を掩く、以石の如く如雲道者字と款す、如雲を別號也、名を道淳とす、敢て辨とす、是より、其の同郷人の画一幅、築中、其の坊けり。

七月八日記

○三田村鳧魚「日本人」連載する幕府大名の内祿、
 属する者流、多くハ内閣の子に因りし一漢臭味を
 リ得る早大の出版部と其の上様をわたくしとす
 乃ち二る目を投じて、要約を題して、八、九、十、印刷
 へ附せんとう、皆、保て、海内と出版部とを
 考るゝ、廿二、協、日、海内、の、案、事、所、の、者
 録、の、真、雨、日、こ、こ、き、高、略、を、入、す、余、の、
 三四の考をを、選び、決、又、提、出、す、曰、く、大、名、
 内、祿、侍、曰、く、大、名、妻、祿、録、(或、ハ、依、)曰、く、内、閣、史、
 曰、く、幕、府、史、曰、く、大、名、の、内、房、と、其、等、敢、て、作
 成、と、自、ら、の、後、事、を、あ、ら、う、古、道、を、刺、激、し
 て、挑、発、的、の、考、を、二、分、ち、し、め、人、為、也、と、
 十二

余の撰の所、此とて、曰、く、内、也、妻、や、皆、出、版
 部、出、す、考、を、と、し、を、終、り、大、名、生、流
 の、内、祿、と、そ、の、決、す、
 の、有、天、三、太、六、橋、ら、自、一、紙、終、り、古、柳、島、に、
 謝、状、代、り、と、托、し、本、の、郵、送、す、其、文、左、の、如、し

北齋瞻仰常依

化日之輝 東海言帰信切

春風之慕 敬維

六橋仁先生閣下勲祺延書

政社懋祥至以為頌敬謝者 通景表

立

貴法晉謁

崇階守勅

垂青敬聆

雅教名書珍藉啓筵維觀享眼福慶感謝

莫名況且當勅

大筆沾榮幸更殷 謹當永承 寶符用加 弘

秀也 雨函端泐藉鳴謝悃順頌

鈞祉

名另具

易麻七月初十日

(元利日記)

書角雨

二橋先生勅啓

市島通玄檄

○支那人の招待状形式左の如し

某月某日某時刻 潔樽候

先

姓名 謹訂

座設、樓

簡、之要を得、之要文の四、此の簡潔の式
あり、我邦之人の例あり也

○東人詩話二冊、成化年中、韓國、達城、徐
侯剛中、著す所、貞享下卯四月、
本邦、よ移し、上梓、す、所也、卷尾、略、漢
本、持、の、跋、又、の、曆、年、方、朝、鮮、使、
其、朝、の、的、書、的、形、隨、多、中、の、あり、
此、人、去、
る、
の、
父、
菊、
池、
耕、
者、
其、
の、
を、
者、
の、
原、
を、
こ、
と、
ま、
の、
韓、
人、
の、
詩、
話、
と、
し、
て、
ま、
試、
と、
上、
乗、
の、
もの、
う、
し、
日、
を、
覆、
刻、
の、
年、
代、
七、
六、
七、
の、
く、
珠、
を、
と、
る、
う、
ん、
定、
る、
書、
屋、
尾、
に、
書、
林、
の、
名、
を、
記、
し、
田、
坪、
屋、
書、
助、
の、
下、
に、
古、
風、
の、
方、
形、
の、
印、
あり、
こ、
の、
ま、
書、
林、
の、

○印、く、く、古、林、の、名、と、ま、す、古、意、物、を、
へ、ま、す、の、あり、七月、十、二、日、夜、牧、業、中、神、田、
村、に、書、林、と、書、の、價、を、ま、す、の、也、
○古、池、書、三、つ、寸、法、也、と、記、す、古、人、菊、池、性、
を、飲、中、八、仙、と、記、し、の、也、書、首、に、題、字、回、
の、跋、の、に、八、仙、を、記、す、画、古、一、程、の、物、味、あ、
り、
○早、魁、の、折、柄、此、寸、帖、と、
書、も、款、印、せ、す、の、也、(七月、十、二、日、記、)
○葡萄、石、印、材、二、款、刻、を、山、に、藏、中、に、
韓、字、の、印、材、の、人、を、て、印、刻、を、ま、す、す、
黄、城、
印、其、強、也、

同上

○北東の...物運天津...
 約入と撮影...
 皆後の白
 船内の人と
 同上人書
 亀寿也



十二 (12)

○支那旅行中...
 各戸の前...位牌...



瓶に入れた供へは巾の有家無きある、何とも思つて立寄
つて見ると、位牌の面もまた左の如き又そのものである、
祈雨の行事しもあること、今つれと昔きつけんある
其の位牌の文言ハ流石支那式である

油然祀雲

供
五湖四海九江八河龍王之神位
奉
沛然下雨

支那の如き降雨ののり、石の心と祈雨の大切な行
事、政府も余り祈雨の場合に屠殺を禁する
現に奉天に性の時ハ屠殺を禁し、
四處に招待するに時を、精進料理の御座ると多し
XL

○支那の市街に「客棧」とあり、自版の口掲げを
うち、うちこちこちとあり、何れと聞えし
主の宿舎である、又支那町の表裏が法帖を
繕りつて居る、
の力す不をえる、
本を板の上より、
所より目分量で指し、
張りのつけの、
を用ひず、
ことき、
ある便利である、
今さら使用する

ありの入りとあるのは、こゝは日本とこの地の果実
 ハミの糊を、牛乳の又ざらに備ひらんとする一
 事、（山東）の粉の厚さを此の又ざら
 に油をすくひある、この二葉とわすべきである
 ○支那の料理は「時魚」といふ煮肴が出て来る、これを
 煮る時魚の俵の南、海に魚を馳走と云ひぬと比え
 る、形を異るるを日本の甘鯛に似し身の軟うる魚
 といふ、（山東）の魚、自分の魚を恰も此の魚
 の池に時魚を、三つ計りもいふ
 ○支那の純興酒を自分の時を煮て今も本物とい
 へば見てもよく、風味を感して、殊に支那を

多くの酒を杯に凍砂糖を入るといふ純興酒を
 多く、この酒を煮るといふ塩梅は、初めの考に
 いくら塊（山東）の砂糖を酒を注いで、時を煮
 解し酒が甘く（山東）きりぬ、と氣をとり、此が、
 八つの一、時を解けり、酒を程よく甘味を帯
 ひたり、減らすとスルと思つた
 の旅順、（山東）の期に、（山東）の糖が、（山東）の合供
 こ上りぬ、（山東）の地味、（山東）の地味、（山東）の地味、
 或る期、（山東）の地味、（山東）の地味、（山東）の地味、
 或る後、（山東）の地味、（山東）の地味、（山東）の地味、
 の、（山東）の地味、（山東）の地味、（山東）の地味、
 果、（山東）の地味、（山東）の地味、（山東）の地味、

を待ち、そんじ加へて風のまじく海を渡すのむあ
か、旅順を其中間の停泊所とすよへん所は、こら
あると啓る。日波のこへトくみらる、そんを甚く
捕獲するともそのめ、其の故は、何れと云ふ大敵は、一
空軍雲の動くことと群とす。飛来するとも
○昨今の支那の騷ぎ、問題とすつて居る常規の故
は天津に在るが、天津は列強の時、其の庭園が一見
の位ありとす、そのあつては、つと見は、其の庭園が支那の
稀なるべき樹木の多い庭園、や公園の故にあつた、
支那の庭園の意匠は日本とい大体執つ異つて居る
何れといふと西洋の庭園といふといふ、日本の
茶人感化を受け、支那と云ふ支那と云ふ、
十二

居る故に感し、此の常規の庭の如きも、石の立派な庭
路を築き、その左に右に多くの樹木を植へ、その
の心、技巧を全無に、保し一人一人の庭
をありとす、その庭の多し、此庭と其の庭
家か住居し、此の庭と云ふ
○満州や支那を遊んで日本旅館におす、その庭を不謂ふ茶
代の款か、其の庭を感する、西洋旅館をこら、
及して、西洋の庭を、その庭を、その庭を、
その庭を、その庭を、その庭を、その庭を、
結句に、その庭を、その庭を、その庭を、その庭を、
西洋旅館へ、その庭を、その庭を、その庭を、その庭を、
に、その庭を、その庭を、その庭を、その庭を、

○大連に上田恭純：今一時的、西郷五五時代の「大連」と
遊覧を自著の冊子と題して上田の湯城に入る前
冬謀を却と勤め、日露戦後の各大家をその内
衆を多し大連の由緒を元神へんことあり、此
の冊子の我軍大連に敵軍とすべし、此
種々の文書を根拠として編纂するに於て大
連の創始代の小歴史を著すべしとあり、其の
旨を論中に見ゆ、其の比喩、多岐に
渡り、蓋しこのことあり、其の由り、この一
を解するなり

○支那むと今ある女流の個性を認め、その他の
習俗、男子とせし集る、別する、換ふこと、無
いこと

んものも今あるの流り、如きことあり、此の
中よりある流りあり、其の天の教育、實に、一
を認め、時、支那の習俗、其の、細る、其の内
情、し、その、此の支那と、其のあり、
の、支那の、其の、東北の田舎、其の、
向此の、其の、何れ、其の、
し、人、其の、滑、其の、
此、支那の、其の、其の、
今も、其の、其の、
園の、其の、其の、
し、其の、其の、
時勢、其の、其の、

心と心するのと云ふ物事、ことごとくが、者へんをあた、こゝろを
公園を取締るもの、心得、特、考、い、れ、よ、と
思、い、ん、ら、

○支那のことゝ云、在場、の、不、定、定、さ、る、も、困、り、者
ひ、あ、る、自、分、が、口、を、を、ま、さ、し、出、か、し、る、の、前、で、あ、つ、れ、
か、た、も、え、の、高、う、ら、れ、ゆ、日、を、の、に、勢、ハ、百、円、に、
三、十、六、元、：相、向、し、れ、こ、と、も、あ、つ、れ、自、分、の、北、京、に、着、
し、し、頃、を、終、り、え、か、ち、あ、つ、て、る、因、り、の、き、こ、十、元、
七、十、元、位、に、さ、う、ら、れ、僅、之、日、の、事、は、六、十、一、元、
さ、う、七、十、一、元、：危、ん、に、こ、と、も、あ、つ、れ、誠、に、あ、る、物、
ま、る、も、の、で、不、協、定、の、もの、心、あ、る、所、に、さ、し、
任、す、る、と、云、自、ら、相、持、の、根、性、も、死、に、さ、し、

と云ふ、日、我、ら、故、終、官、吏、の、物、人、を、さ、し、と、あ、
さ、う、こ、と、も、さ、う、い、さ、う、日、々、あ、る、弗、相、持、の、投、機、
を、思、ひ、ま、さ、し、る、と、さ、う、ら、れ、と、誰、ん、か、い、さ、の、れ、
あ、る、終、終、の、中、の、海、に、船、の、上、げ、下、げ、に、私、共、
お、客、の、扱、は、れ、し、と、日、を、ま、さ、し、る、と、減、ら、お、氣、
の、事、に、思、ひ、ま、さ、し、る、こ、と、も、あ、つ、ま、す、日、を、依、
節、の、甚、し、く、あ、る、海、の、事、の、併、し、及、お、れ、
お、客、扱、の、方、に、有、利、の、事、も、あ、る、と、さ、う、ら、れ、
之、の、大、下、さ、る、の、時、に、海、に、船、の、上、げ、下、げ、に、
お、客、を、あ、げ、さ、す、と、コン、ナ、ル、鉤、を、使、つ、て、さ、る、
の、事、に、仰、い、た、こ、と、も、あ、る、と、さ、う、ら、れ、
日、を、ま、さ、し、る、と、支、那、海、に、行、く、と、今、さ、う、ら、

中頃の平巾を乾燥してそのものを出すことには
知りたぬが支那ではあるがその的出すの
るゝ人を坊子で出し、茶店に送るもの出し、
汽車の中にも汽船の中にも出す、支那の乾燥
の氣候は減らすべく一往の所地
走である併し平巾の乾くも雪白は無
山寺をもく登つに時に出して来た、平巾も
将圓油の三毛も浸しに乾く汚らうといふ
であらうが、志し久しき染り乾きしてあること
イキンの無いと出のよい同行と兼渡して
○支那市街に今も十数年のこと、術
の平巾も兼染も使を垂れ流すものも無く
十二

志し久しき染り乾きしてあること、
か遠く電気が乾く面を撲つ、蒼蠅の群が
来て食肉の上で増殖する、何れも云ふ
汚穢にして白界を掩ふこともある、
行者も余の潔癖を笑つて、支那の字
の汚穢と云ふ、そのうちありと云ふ
○余が油朝後訪ひ、人口々として
問く支那の骨董の塊出し、無つた
着し、余は骨董の味あるを知つた、
自此問ひ、是れ其面白く、支那
自身が大骨董と云ふ、然り北京の
大骨董也

○支那滿洲の乾燥天地を日よのめき温熱の海に
 ちかちか往つて見ると著しく氣持よく感ずる。呼吸器
 病に害ありと云くどいし。呼吸器病に不快なる氣分
 うまく汗が出ぬ。丈が一寸紙巻煙草
 を吸ふ。火を踏して足も決しと消えること。この
 内地は或年々使用しに常用の杖のこども塗料
 う使然として附着しにそれの支那活字の
 刷り及し。又筆畫のこども一二を免れしを
 半した位のふる自分の出さけに遠く曉まで初夏
 の氣候にあらはれぬ。其の味ありと云うに
 とめりいあらう

○支那の雜貨店より銀紙の形

じらくーにこのの推く重りも居る。或はちかちか
 早きんで風を飄うして居る。何り用をある者と
 ありあり聞けは馬蹄銀を形とつれ七の
 とらふ。まんをどうするのこも聞くと神社へ奉
 納する。其の錢とさき一吸をさした。

○支那の鹽候は同じ大河の黄河と云ふを其
 揚子江と利を並つくと云ふことある。こゝに
 ありつゝ多敷訓を念んば言をいひ嘆みかゝるも
 無限の味がある。揚子江の黄河は優ると云
 淵博なるや論す。

○日貨排斥の聲は支那に遠くあるが、日本
 のお貨と仰うが支那に主行くこと云ふ

一男三行のぬえとすりもろい、支那の今つら西洋
の貨物と要するもの、進みくなく、大改め
せう、し出まゐる、海軍の、糧道が、拾はる支那の
数の、需用は、拾ふこと、梁華と、日貨を、排斥
すとも、ろく、其、實、商標を、張り、挽し、之れを、使用
すも、也、若し、真、日、日、貨を、排し、り、又、實、日、貨
物を、愛、し、し、る、んば、支那、即、の、内、族を、揚、
其、海、軍、の、げ、ん、也

○國際親念を缺く、日本上下の通患也、よん、言、ん
一島邦、ろく、し、坐、す、設、合、い、教、育、以、て、之、れを、首、す
く、も、定、ま、る、を、容、め、る、んば、若、く、も、一、た、代、大、陸を、踏、
ま、し、あ、る、ん、僅、く、一、世、年、海、方、を、踏、ち、つ、着、

すも、即、日、國際親念を、起、せ、ん、日本、と、四、海、親念
に、於、て、今、く、零、ろ、う、新、書、記、録、の、如、き、操、舟、を、以、て
任、と、す、る、もの、と、若、も、着、し、此、の、親念、の、欠、如、く、着、る、
日本、の、自、國、の、利、を、自、か、う、言、す、る、の、言、動、を、可、
し、言、と、せ、ず、其、の、吞、氣、ろ、う、る、こと、寧、ろ、う、滑、然、と、磨、
削、し

○支那、ろく、も、馬、賊、も、身、を、記、し、て、今、現、に、権、勢、を、
この、ち、ろく、張、心、雷、の、如、き、こ、ん、ろ、う、一、ク、リ、リ、と、
身、を、起、し、其、花、四、方、に、馳、す、る、もの、も、張、動、の、如、
き、こ、ん、ろ、う、支、那、の、水、滸、傳、を、元、代、の、記、ろ、う、止、ま
るか、又、現、時、の、記、ろ、う、と、言、ふ、を、得、し
○北京、か、上、田、恭、助、の、名、を、訪、心、多、く、の、肉、骨、を、見、れ、中

十錦手の花菖蒲、あつらひ、其香甚量と見ゆん、洪憲
 年製の四字を認め、これこそ素世凱が皇帝と云
 つたその時以前、朝法帝の爲せし、傲然斯の
 器を西群、以欲らん、とて、早午四、心せし
 と、一七あることに想到し、一、天を催した

○満洲に往つて見ると、滿洲の経営の大なること、
 つつ、滿洲、一大王國心ある、係し、滿洲七増、の時代
 を、とし、た、の、百、業、上、大、災、災、を、せ、じ、丁、ら、自、分、が
 満洲の野村社、と、合、社、に、ゆ、つ、て、面、接、し、其、日、か、七、
 爲、入、り、し、の、冗、ろ、を、物、は、ち、ん、と、す、る、日、は、あ、つ、た、
 北、均、法、に、所、寄、る、と、い、ふ、也、一、業、の、を、要、す、と、
 以、折、角、経、言、し、し、鞍、山、店、の、製、糖、所、の、如、き、
 十二

價、下、り、ぬ、の、為、め、と、信、承、不、便、
 の、の、に、し、む、さ、る、る、に、つ、つ、と、
 る、の、に、し、む、さ、る、る、に、つ、つ、と、
 之、ん、と、中、止、す、る、こ、と、
 年、大、出、身、を、自、今、一、年、の、
 年、無、人、と、い、ふ、一、年、
 の、美、田、子、も、今、其、の、雨、
 傳、
 社、獨、り、と、い、ふ、と、や、
 の、妻、の、境、と、曰、た、を、
 方、ら、
 大、垣、の、上、の、家、の、
 生、ん、

温度の（高）あるにけりんば湯城の寒き（高）仕中
 をする首屈と申し不も任じあるこの如く感
 ①（高）

○^高ち（高）獨人（高）徑（高）路（高）自動（高）車（高）道（高）路（高）の（高）流（高）石
 に立派なもののひのし葉あうし（高）東京（高）の（高）道（高）路（高）掛（高）の（高）飲
 む（高）せ（高）い（高）位（高）も（高）の（高）心（高）あ（高）る（高）九（高）折（高）七（高）里（高）計（高）す（高）ま（高）ん（高）多（高）物
 村（高）甚（高）ま（高）心（高）監（高）興（高）は（高）老（高）里（高）も（高）と（高）上（高）下（高）す（高）ま（高）ん（高）と（高）も（高）こ
 て、（高）自（高）動（高）車（高）は（高）二（高）時（高）分（高）程（高）後（高）ち（高）る（高）と（高）云（高）ひ（高）て（高）大（高）抵（高）道（高）路
 の（高）中（高）に（高）も（高）推（高）測（高）が（高）つ（高）く（高）の（高）中（高）は（高）此（高）の（高）道（高）路（高）の（高）内
 に（高）較（高）し（高）低（高）い（高）と（高）も（高）さ（高）し（高）と（高）も（高）こ（高）丈（高）が（高）鄭（高）重（高）し（高）石（高）の
 道（高）が（高）低（高）く（高）い（高）る（高）に（高）は（高）驚（高）か（高）ら（高）ぬ（高）も（高）あ（高）る（高）何（高）れ（高）低（高）い（高）と（高）も
 丈（高）石（高）の（高）築（高）て（高）ある（高）こと（高）や（高）く（高）と（高）或（高）る（高）期（高）節（高）は（高）形（高）が

沈没するも此の低地と川とより変化する川とある
 つて（高）車（高）が（高）通（高）る（高）所（高）も（高）此（高）の（高）工（高）分（高）に（高）あ（高）る（高）こと
 高の（高）石（高）の（高）築（高）て（高）ある（高）道（高）を（高）河（高）底（高）橋（高）と（高）も（高）い（高）は（高）る（高）こと（高）な（高）ら（高）ぬ（高）か（高）ら（高）ぬ（高）
 の（高）一（高）種（高）の（高）橋（高）と（高）も（高）思（高）え（高）ら（高）ぬ（高）事（高）も（高）あ（高）る（高）

○朝鮮の白装束ハ何れも来れりて、或と云ふ或
 の時代の國喪の服は終る永久の服判と云ふれ
 の（高）れ（高）と（高）果（高）す（高）と（高）然（高）る（高）や（高）も（高）あ（高）ら（高）ぬ（高）事（高）も（高）あ（高）る（高）が（高）千（高）年（高）以（高）前
 前（高）ニ（高）イ（高）テ（高）あ（高）る（高）に（高）ハ（高）四（高）五（高）種（高）の（高）着（高）け（高）て（高）あ（高）る（高）
 服（高）が（高）現（高）代（高）の（高）朝（高）鮮（高）の（高）服（高）装（高）を（高）つ（高）く（高）り（高）し（高）て（高）あ（高）る（高）こと（高）と
 ころを（高）考（高）へ（高）る（高）と（高）の（高）ろ（高）う（高）も（高）千（高）年（高）以（高）前（高）の（高）風（高）俗（高）
 であることと疑を容れらるゝ、此白装束と

清潔の事、**朝**の養ふによむことの極み思はる、
白地を洗ふは、**朝**の洗穢するに在りて目につく
おりの、洗ひ淨めぬ、而して其の
に於て洗ひ淨めぬ、**朝**の洗穢するに在りて目につく
にける、**朝**の洗穢するに在りて目につく
と、**朝**の洗穢するに在りて目につく
朝の洗穢するに在りて目につく
洗を習得と云ふこと、**朝**の洗穢するに在りて目につく
衣服を清潔にする習得が、**朝**の洗穢するに在りて目につく
の道守えて居りいせぬ、**朝**の洗穢するに在りて目につく
美服をつけしを、**朝**の洗穢するに在りて目につく
衣服の汚れを、**朝**の洗穢するに在りて目につく

と思ふ、**朝**の洗穢するに在りて目につく
の事、**朝**の洗穢するに在りて目につく
を、**朝**の洗穢するに在りて目につく

○朝鮮の男子ハ遊惰ハあるハ婦人ハ
遊惰ハある、男子が遊ぶに、**朝**の洗穢するに在りて目につく
婦人ハ遊ぶに、**朝**の洗穢するに在りて目につく
朝鮮の早婚の弊、**朝**の洗穢するに在りて目につく
地を、**朝**の洗穢するに在りて目につく
、他人の家、**朝**の洗穢するに在りて目につく
其の能率の増加を、**朝**の洗穢するに在りて目につく
、**朝**の洗穢するに在りて目につく
、**朝**の洗穢するに在りて目につく

は格もぬ世も年長びある。丁が才の家の嫁日未だ
あとの世に、血氣盛りの世が、老翁の若しやせぬ少
年のものも、嫁するのむある。こゝろ、男子うち、
抗上取を取つて、終に愚鈍とさう、年輩の
従つて本妻を棄てて、妾を蓄ふこと、此もさう、
の游惰一般の風を、さうして居るか、働きの重りの
女子か何んの家庭も、歎けやう、こゝろつさう
不釣合の夫婦の生ずる原因である。

○日本人の北京に遊ぶもの、日本公使館を、一比心を訪
ハ、ゆるゆるぬ、こゝろを物をして、志の目、さへ入るもの、と彼前
の、大さう、石道の溝、うて、岸、楊柳、翠と、競ひぬ
る、由あり、氣、うるも、道、現、こゝろ、を、河、溝、と、稱し、却

の、を、冠、ある、もの、由、緒、ある、所、り、と、為、り、を、と、此、途
に、楊、柳、院、臨、隱、寺、唐、帝、後、太、僕、寺、禮、部、吏、部
兵、部、戸、部、等、の、官、署、あり、四、方、政、務、の、政、令、を、こゝ
より、発、し、たる、も、然、る、ん、世、の、為、を、務、ま、る、と、此、京、各、四
使、館、に、番、し、去、り、今、う、ち、支、那、人、は、な、す、叶、の、ぬ、家、と、さう、
由、緒、ある、御、溝、外、人、の、た、る、ん、一、風、政、を、典、ある、
こゝろ、き、ま、す、日本、使、館、の、前、面、溝、を、隔、て、一、段、の
山、越、ゆ、と、さう、の、と、英、使、館、と、さう、を、ん、を、圍、繞、す
こゝろ、に、石、壁、と、さう、の、鏡、眼、穿、ち、ある、と、さう、鏡、眼、
何、ん、ち、紫、林、城、の、向、心、居、ると、さう、の、跡、を、う、る、が、
北、山、の、り、と、佛、伊、澳、獨、白、西、等、の、使、館、あり、皆
る、居、れ、禁、禁、を、睥、睨、する、の、觀、ある、と、義、和、園

し置き後之れを大興府と稱し之の大徳十一年
徳治二年 虞集大都の教授なりし時之れを泥叶
五一三〇七年 中江得初の國之の置きし後之れを孔子廟
大成門内に遷移し以て今に及べり三千年才
或夜か特に昔野泥土に垂ちる風刺雨
蝕文字の現存するもの僅る三三廿五字なり
之ふ此の文字は五王の臣史籀の篆と傳ふ
〇北京市街に著名の二區あり 琉璃廠と云ふ北京
外城前門大街より西教町に流るの市街なり 琉璃
の二字のちと五色の屋瓦を製するなり此地は
琉璃堂を置き以て今に及べり今に此堂ありや
を以て主として骨董園古文房の町と云ふ

いさる。今も二がまむ此街を測りて文房店古店が
目録を種々過りたるも格別のもの無りし
其のちり、市街の古店ハ鞠文古書賣并
其其他の此等の店鋪を例として奥より
所より室を構ひ、冬を暖くし、夏を涼くし、古樂
を置き多くの圖書を揮ふ、此中より往々珍者
ありとすけは、別に珍者のものを見る所のなり
一、此の街を緩急の暇と欲得たりしは、因らん
か見渡せし所文亦わらむ、格別おもしろく
但此方店に遊ばせし中村文房が古書賣の全
集を三十五元と購ひ、文亦わらむ、其價三分
一とす、其の古書賣の價も、其の古書賣の

（再）
り、併し普通にても價廉なると宋元政の稀觀をい
ふつと内地に比すれば十倍二十倍とある國も
あると後なり。

○北京の市街は日常定に殷賑のたむ、其の混雑を
減る言はれ絶す、日本を以て年の市や或る特殊の祭
日に、此特別繁華の状を呈する市區である、北京
の市街繁華の市の市街をる例のむ、日本の特殊
の日よりもより以上む、め何れも雜物としてある、殊も外
の車、つくり、カバン、シャツ、靴、キー、く、此類を
賣る、賣る、全体支那の首善油の特色を此のキ
ー、く、類にあらすもの、例の一輪車、のぬき、也、會、音、
を、見、る、波、幅、の、ち、う、を、車、輪、の、輪、を、毎、日、キ、ー、く、の、音

（再）
支那の樂人の奏する歌も、宋元政の又キー

カンパシッ、メ、類、を、見、る、も、感、を、お、客、の、心、を、打、つ、時
に、エ、ラ、ッ、シ、ヤ、イ、と、挨拶、する、体、合、の、音、を、聞、く、こと、と、キ、
何、と、も、ま、い、ひ、の、ま、の、陽、氣、の、あ、ま、の、む、い、つ、も、む、も、平、平、
け、し、清、え、る、の、路、に、あ、る、す、ら、こ、ん、を、油、子、の、か
ん、じ、り、油、が、市、中、に、あ、る、満、ち、満、ち、の、氣、も、あ、る、ば
笑、み、も、あ、る、ほ、く、も、あ、る、ば、あ、る、も、あ、る、の、心、を、あ、る、こ、う、
宣、○、宣、○、の、巷、街、に、満、ち、初、め、に、市、街、に、あ、る、
の、の、繁、々、しい、の、心、を、あ、る、こ、う、を、感、した、そ、う、と、同、的
に、支、那、の、四、民、の、繁、々、しい、動、機、を、あ、る、こ、う、を、感
し、し、
○支那市街と十字着の物車夫が居ると云ふ、何れ

骨格の道 （色の黒い） 馬賊 （思） とらうらうら代物
 がある。この等ハ旗の兵の成れの果て、兵制改革
 の結果別々ありわらへんとその職も無いものな
 車夫に妻これの心ある。下る日をもの維新後
 に士族が祿を離れて種々の賤業に自身を委し
 ると同格である。されハ旗の代りに起つて兵と
 旗 （旗） といふと名物の生白ろい駒（駒） くしい才子肌
 の若者で、此等 （鏡） 鏡を執つて （市街） 市街の辻々に三つ
 て居るが、浴物のあま （鞭） 鞭を執つて （鏡） 鏡をす
 む （日本） 日本 （鏡） 鏡を （鏡） 鏡を （鏡） 鏡を
 時のことも （真面目） 真面目の氣が起る女 （七月十日） 七月十日
 の北京は市中各方面を遊覧し、せと欲しく思つた

の北京は、山都の名を詳せん地誌に地誌に
 つは、瑤瑤殿の古碑をたぬ時、一に披く、これの
 り地誌にあらうが、僅かに北平孫承澤の著し
 春の夢の録を得た、これと古考有鑑賞袖珍
 のゆかり （日本） 日本に （来） 来 （抗） 抗
 自分の見 （神） 神 （集） 集 （抗） 抗 （自） 自
 向つて貴 （心） 心 （有） 有 （通） 通 （之） 之 （と） と （親） 親 （ら） ら （女） 女 （と） と （三） 三 （の） の （北） 北 （平） 平
 ろ一 （奇） 奇 （と） と （云） 云 （つ） つ （れ） れ （か） か （今） 今 （く） く （初） 初 （め） め （て） て （見） 見 （る） る （所） の （女） の （心） の （心） の （心） の
 部二十四冊で自分の購つたものを近年西渡刻し
 りである、これを問ぬに北京のありやう方面
 なるま （進） 進 （ん） ん （び） び （と） と （悉） 悉 （して） して （居） 居 （る） る （古） 古 （考） 考 （有） 有 （鑑） 鑑 （賞） 賞 （袖） 袖 （珍） 珍
 題入つたのも偶々ひまの、自分と可成種々の圓

のあつたものを得たのと思つたが、宮殿の園のあつた
てきえ一部も得たことこの出来さうなれ、そこで自
分の葦葎をう括園して玉山の版下をあらうせ
る土名所園令の初めを貴重であることを感
し、此の者を種々の不回来るが、續出しに次
そのあつたもの体に編纂し、此のひあるが、終
園がめつたも精巧ひ且つ汐山とあるに、
支那統味の漢方家の臥浴：供日さん一時珍寶か
らんたものひ、自分のあつたもひの一種の玩具の
類に元扱つたものひあるが、支那に未だ定地：就
てえと園が物種ひある且つ、えんをのものを支
那のものを扱つたもひ得えんもの、
十二

と此者と今とさうして金に傍依のあつたものひあることを
知つた惜しいことと本書を六冊扱えさうな切りひ
あつた出ぬ、志、直隸と宮瀨の部に分丈と
刻さんとあつた、自分の差向く用いさ足りの
所さう物あつた、古物心を漁り辛あつた一部を
得た、試みえんを繕き、今と各使然の不備地
とさうして長、御溝の南園、啓書、府藩書院
戸吏部オの官衙のあつた、あつたも此方の
園に徴するに歴々往事とを説くものかあつた、
細の園ひ表示えんて長、
○今方のあつたの旅行ひえ、
所が少さうな、場

後つくり方と一點の疑圖を生じた。何なる折角點も
出し、北京に切つて一週間の滞在をしようとい
はあろう、何れ帰路曲阜泰山を登攀しようとい
二三日を費さそうといひあろう、ちかきに舟の費
する日を標準に日程を作つておせよ、舟とを週百
毎にせよ、何れ一週間でもせよ、舟とを週百
せよ、早に帰國を要するもの用
務があるか、旅費の不充分か、と云ふ
と、他原が續かぬことも無い、兎角急ぐ出
ると急ぐ氣さうなり、後々悔えることもあ
る、~~ハ~~ハ、真の悔恨の極に達する、
○何れの植民地にも多く軍事占領を因す

七のひあるから、兎角の占領者側の國民が、被
飲國民にありし無理を遣ふ、甚しきは横暴狼藉
を盡とせし、抑ふ我儘を遣ふ、この武的占領の
餘風をいへば、己とを得るの法果てあるか、占領後
漸く歲月を経るる、整理を先け以後、斯
の餘風を飽くも根絶しないものがある、占領必
に先延びのがある、被飲國民に對し雅量
を有し、然るるの理念に、さういふ内容を
行き、そのおもて見え、今や、揚州に市街を自
動車や馬車に乗り、共々、感したところ、
ある、ある、我々の馬車自動車を操縦する運
轉手が支那人の、~~運~~又誤つて觸れし車体、

かの横傷を生じた。その為ら日本運輸手のあるの
たが、支那を止むの途とせしめ、直ちに車を下つて
罷り下るの支那人を放りし打のめす、個に、支那
現不害のよりか、毎の事件あるに、支那、支那
人、支那の氣の毒なるが、支那の支那、支那
自分等と雖も支那人側、支那の支那、支那
ある、支那や日本人とせざる才三者、支那の支那
を日支とせしめんと感ずる心あるか、支那の支那
り、支那入り込み居る支那の探偵を日支、支那の支那
の横暴を報告するところ、支那の支那、支那の支那
利する材料、支那に於て石も多し、支那の支那
ういつし、支那の不利を、支那の支那、支那の支那

害と為す、支那の支那、支那の支那、支那の支那
元も不可、支那の支那、支那の支那、支那の支那
心あり、支那の支那、支那の支那、支那の支那
分、支那の上の、支那の支那、支那の支那、支那の支那
感を生じた。

○朝鮮京城の、支那の支那、支那の支那、支那の支那
に、支那の支那、支那の支那、支那の支那、支那の支那
庭園と教養する、支那の支那、支那の支那、支那の支那
造、支那の支那、支那の支那、支那の支那、支那の支那
う、支那の支那、支那の支那、支那の支那、支那の支那
附属の、支那の支那、支那の支那、支那の支那、支那の支那
史の、支那の支那、支那の支那、支那の支那、支那の支那

又もと果つしんこんと韓帝の即位の式を奉けに壇
此の境内を修むの建物は附帯してあつたが、流
飲を建つためか、心へてえ拂ひん、今存するもの
心あると聴え、自分をつくく思ふ、即位の遺
蹟を韓帝廟の崇敬の的とするてあるもの、お
あつた、あつた地形が流飲の建設をなして居るの
くと、その、之れを避けるのみ、多くの記念建築
を破壊し、たが神聖と崇敬する、即位壇を流飲
の玩弄と供する、ことと、心無い業、韓
氏の怨恨を、招き、未長と招き、長く誘致するの愚
を、力す、い、返す、く、遺儀、む、ち、と、是、一、す、概、歎、せ
し、免、比、か、植、民、地、を、先、角、切、換、る、又、態、か、有

リ、あ、ひ、あ、る

○支那の四億の國民、若くは、世界に散在する國民も、六
莫大の、い、か、あ、る、此、等、の、多、数、の、國、民、の、大、部、分、は、眼、一、字、も
無い、無、法、無、義、の、七、の、七、~~無~~法律、う、り、布、さ、ん、と、さ、あ、る
さ、ん、う、後、め、る、と、さ、あ、る、~~聖~~賢の致う貴いと、さ、あ、る、七、其、の
行、う、後、め、る、と、さ、あ、る、~~治~~治まりと、長、く、七、の、七、と、
誰、れ、も、不、思、儀、に、思、ふ、位、に、あ、る、今、方、實、地、遍、歴、し、て、
こと、ま、ま、う、く、不、思、儀、の、處、を、打、つ、と、幾、千、年、を、以、つ、て、
ある、苦、働、者、の、こ、と、ま、ま、う、く、~~真~~真に生きる、と、さ、あ、る、働、い、て、居
る、親、を、あ、つ、て、日、本、の、苦、働、者、の、扱、ふ、位、に、あ、る、お、か
は、さ、い、~~實~~實に、擡、げ、な、さ、る、と、さ、あ、る、然、る、に、其、の、割、合、を、
法律、を、以、つ、て、測、り、さ、る、こ、と、も、さ、あ、る、~~平~~平、た、い、な、く、平、穩、に

沈まらざる行くのを其の國民性に依るとのむあるべし、保し
國民性を失ふ或るは一種の倫理教を無けんはるるぬ
れ多きを何んかあるうう、先角今まを支那の倫理
教を儒教殊に孔子の教に在る如し偏論すること
ううたるあるか、實を孔子の教を上流の智徳階級
の必行りんと、支那多數の下層を支配し居る
ぬこととし、代向の人の支那を研究し最早
動うぬ事実とありてあり、支那の一般國民を早く
うう支配しとあり倫理教を寧ろ道教ひあること
ハ分るる實心を見てまあり、然りと信する、道教を
下層國民の共鳴し下層の實心を得る、故に出来て
居る、彼等の迷信を寧ろ是れ、之れを藉りて

彼等を道すべし、つて居るさし、其の所めらるるむある、支那
人と徳法根性か強く、此の根性を挫くは寧ろ之
れを利用して善く道すべく、風を立るるあり、即ち
積善の家より、既善ありと云ふ後、徳法の方又
利用する、下層國民を守ること、これを認む、譯は、
道教の老の口を、民性を逆つて、其の所、特徴ある
つて其の善通の勢力と有するあり、此の所、以てこ
こに在る、い言ふ、其の保し、其の支那國民の或
るの缺點も、六道教、三階階として、其の思ひ、
ハるる、其の先角、孔子の教が評判あり、支那を行
んて、居る、其の事、孔子の教を國民の
多數を占める無知階級、其の事、あり、其の善通

力の無いことを考へ、浅の判断で容易に理解せしむる
實地を之とせざるに於て、確たる理解がつかぬ。

○外國の旅行先とする首途に、清のこの地を離れ、
九を回を振り返つて見ると云ふ人がある、この意味は
一瞥して、自命のハを回を離れを振り返つて
見たいと思つて居るが、今方轉り、其許其望を充
つた、……自命のハ、又其許其望を云ふ、
實に外國の旅行先が日本を去りて文化の遠く、
振り返つて居る外國を去りて、充命のハを振り返つて
其許と云ふのがある、そのハを回を離れ、
を回を去ると云ふは、格別な感しを感ずる、
のハ、分見へる、日進月歩の植民地、
を回を

見ると内地を脱して、充命のハを去りて、
ハを去りて、其真相を去りて、
自命のハを去りて、
んと欲せば、老人のハを去りて、
外回を去りて、

○大連に現在する、
くちある、この地分敷の多いこと、
人の藝術、
の裏面が現れ、
の満鐵、
無い、
流、
くちある、

のもあるをいひのき存せしむべし。兎角植民地の缺點を
獨身者風の多いことである。何れも獨身者が多いの
と云くハ、一原因として家族が遠く植民地に移ることを
欲せぬと云ふが在り、これより日本の天香根を以て根
性としてこれを根絶するもあらずんば植民地の安楽を
約し難い。獨身者風の日の増の振らざる原因と
兼し主として家族を欠くことである。

○北京に在留の日本都名聲ある竹内梅鳳も未
だ居ると友人が先け此、画材をゆる漫遊をと思ひき
や、内地を歩けば、内地を這く不日東風吹きす
と云ふ、前金を画を依頼して面々が、陸續破産を申し
み前金の多印を求むるが、多金を求むるまじくは

印するに北五弟用も多し所々、流石の梅鳳も互
し多き草を載せし難を日滿邦に廻り、何んか
借金をして画債を這へ、画債を償却するのむあ
ること
(揮毫をもつとの道)
まき、圓をす一家を
し比

(七月十八日録)

○北京の宮城内三海と稱する大なる池あり、俗
に北海、中海、南海と云ふを居るが、五龍亭、葦園
瀛、葦園の名を呼ぶのが本名なり、池の總稱ハ大液池
あり、或は金海、西海子、西華潭、らむの名も
あり、が宮城の大液池あり、元來此地の存在地
と宮城の西華潭の西方にありし居るの、苑
自身を西苑と目稱して居る、西華潭、西海子

と西を冠する名に池をとりてみるも北故ひある、全
元頃より帝者の離宮に、北京の如き大佛殿の如
こころの池ありあるのを珍とするも、京に
ありとすふ丈も一花勝とすも、是のりしを、實
に此の所か自れに在るのむとす、元の世祖が百年の
大計をたすに、帝城の飲料水を濶きとす、
深淵を北に築城する、海、萬壽山の日以
池をとりて、引水のが、即ち此の三海のある所
以、此の所を今日をの使館の在る東交民巷を
横断し、前項の池に、海、下注き、
漢城河に注ぐ、故より、保し、
おの、是、
日、使館の前

海と

海は、
此の多量の水を貯るに、北京の、
大なる花勝とす、
凡、
置、
の瓊華島の南方に、
中華民国の政況と、
大なる名、
○満州支那の、
の價の廉、
飲、
甚、
重、
埃、
シ、
ト、
ヤ

も出来ず、……一或許の事犯者を検出し得ざると
するも其の款ハ完ニ言ふべき程なる(キヤセ)の
を思へバ……之れを為る者給を捕縛し多くの税関
吏巨部は……使用するも全く思ふべき元ハ、
税関吏を以て用者一種養成するに慧眼あり、
不正を為す旅客を對し荷物を百(容積)之を
透視するの術ありと云ふ、何と昔人ハ誰彼の別
ハ萬通(通商)の検査をする所の煩雜を敢てするや
英國の税関吏の如きは流石に此道の心得あり、紳士
態なるものには對しんを唯に其々の品を行李の中
に置くますと云ふと云ふ、無しと云ふハ改めしん
去る、日本は格と七斯の雅量こそ望ましくせん

○釜山と上陸して京城……(釜山)に乘り端を憶起し
此の故前路男爵の事ハあつた、故男爵は此の城を
を征すする大努力を盡し、此人のお蔭で此
の城を占領せられた、自今を春來男爵の傳を
編み、朝鮮鐵道布設の部と云ふ、よく不令の事
があつて、つづく朝鮮を知らしむるの遺傳を以て
係を出版し、ついで朝鮮を來ることと云ふ、
此の故男爵が京釜鐵道の経路をとりつて、
満足を以て、疾く義州線の日本國境に上り、
あつたことを論じたるものと、今から京城を
去るも、此の路線を往て見て、男爵の故男爵

の早見に服すも得ぬ （之を男等と
離る可らざる種々の歴史がある。之をしてその歴史と
と考いて測らざる自身分る。一種の感興は排し
洋學の海慨の禁し得ざるものあり。其の七堂より
當れし事もいしある。）

○今方の滿鮮支那旅行に仕合ひあつたりのと別る便
に校友その他の人かあつて、行らるるにつけても深切に世
話をししる事なれし事もある。内地の旅行は各地に
校友のそらりか我等も取つて大なる援助ひもあつ
た。趣味もあつた。内地を離れんと一僑友泣を痛
切の感せざるを得ず。うら比人の深切と云ふもの之外、
特に最も感ずる事誰れもそのがこゝれ其あるがごとし

あつた時と旅費の不充分の事もあつた。或る時は夜さ
の買ひらひの極しきものもあつた。一行七十餘名といふ
多額であつた。いくら我々二三人の特におよぼさ
ずも此種不便のあらはれあつた。まゝあるが、自分の
やを利するに校友や日活生等の出立費や旅費
下生らじが病つて寝させや宿屋の世話をしして是人に
を免れと一かも不便を感じること。無つた。殊に一行
と外んは北京へ乗込ぬ。あつた。七月天より汽車
に入るや否や言説する。○此の不便を除く為
めん。焦つたの野口多内と七月天から行つて
して自分の北京は活在中と通譯を始め、弟編
の世話をしして是れ、北京に旅任の支那も乗込ぬ

為も居つて之れら自分の為る種々轉旋して是れ為め
 に種々の便利を得たのと共に自分中心感謝を禁し
 得ぬ、偉く滿韓支那に在ること廿年の間に余が
 各地に校友会が洲から、多しと出居ると興味と利益
 を得たことも多し、其の無のが、其の保あとの早稲田
 大さよらとよらする、こころ想ひ到れば、早稲田七志
 大執力かひある、帝大出身者とも、板民地より、
 同子出身とも、藤原公一、
 ること、
 らん、冷感の中、木境、
 深淺同の談、
 新、
 切に感、
 十二

誰れを定むる者ぞ

(七月十九日の志)

閑く任せて居るの中のこと思ひ出さるる者なきにつけ
 とも、
 氣を紙を費したのを悔へんとする、但し、
 の見やうに、
 遊けんば、
 秋、
 春城手録

○會津八州と棋仙の墨とを拵とを貯る来ると
 年、和墨を多く用ゐるを、
 此棋仙の墨、
 庶らざる、余平生用ゆる所、棋仙墨と銘、香

壁^しう^ら、甚^しに^まと^りの^まり^も他^の知^るに^比す^んハ^傳の^著也^ハ八^朔心^六棋^仙墨^の信^徒也^今今^余る^物る^所の^まり^楯内^形を^表面^の織^者の^金剛^杵の^鏡あり^重面^の獨^鏡の^回ち^う、^こえ^神通^法烟^とう^ふ直^墨は^し棋^仙得^意の^ちの^まり^ハ八^朔の^後に^接ん^だ此^の金^剛杵^の墨^に為^代墨^并に^香壁^並と^同質^のもの^{あり}、^外見^酷似^しと^并み^あら^せた^難し^神色^法烟^と獨^鏡の^回下^香曲^部に^組書^法の^四字^{あり}、^之れ^を以^て他^墨と^区別^すべ^しと^余情^をこ^まし^し、^磨を^試み^た且^ち机^上に^置て^樂まん^とす^七月^十九^日の^記す

○松雲巻と二三の回考を辨め、中ニ寛文版の

本朝考籍目録を冊あり、三つ切格をいへ、すべし
和考の目録あり、其^に外^縁と^し別^ちに^二十
枚^許の^附録^{あり}、^各考^目の^著者^の名^を録^す、^{日本}古^考を^知ん^とす^るに^北目^録無^く、^其の^終
に^云く、^この^註家^名記^し、^就て^いふ^に、
以^仁和^考考^を書^く、^書く^者、^孝元^院被^尋之^時
注^又云[、]
北抄入考(大納言實冬卿著)所借物之也
永正二年八月甲子考之 師名在判
又外縁の末即ち全巻の終ニ云く
右本朝考籍目録及外縁所載考籍歴代

火試者多矣或存而秘之或卷不之之家者
亦不為不多矣今鑿之于梓者廣其傳令人
人知之欲現存之書也

寛文十一年歲在癸卯正月吉辰

長尾平兵衛刊行

此書曰我書史の上大切の材料なりとも今坊
間之れを獲るは難しハハ十冊子價五圓不
廉多んも辨入る

歙石有葉次姜紹書二酉のの葉つす所勝兼
文庫多し其の葉次姜紹書二酉のの葉つす所勝兼
ありハハ和刻と見ふハ初めより
皆葉次文房書画に就ての地味なり、永樂大典

のり、程方判製墨家のり、河庄藩に伝のり、漢
典を元のり、偶々此方を得るの日
炎熱甚しく午睡を食ふとあるも然らず所と
全部を漢了、六箇夏排河の二具也

○一高佐の江塚圃の遺印と辨のり、臺りん

すものあり、塚圃に去来
の名ありとも、此印材塚圃
圃の代の古物なり、刻も六
邦人の手なり成るが如し、
或ハ森槐南の遺印なり
歎偶々五峯書あり、出し
乙字の、五峯書曰く槐南



①多く印を花をか、其の恐も、槐南の巻(印)を
半(印)然るも生(印)前(印)其(印)印(印)を指(印)こ(印)見(印)る(印)こと(印)多(印)し(印)と(印)云
外(印)巻(印)余(印)に(印)架(印)中(印)の(印)槐(印)南(印)の(印)詩(印)協(印)を(印)入(印)之(印)を(印)換(印)す
らん(印)地(印)印(印)換(印)し(印)あ(印)る(印)所(印)の(印)槐(印)南(印)の(印)印(印)令
印(印)を(印)換(印)し(印)あ(印)る(印)と(印)云(印)る(印)人(印)を(印)し(印)て(印)印(印)を(印)換(印)す(印)を(印)云(印)ら(印)し
訓(印)い(印)し(印)あ(印)る(印)若(印)し(印)槐(印)南(印)の(印)巻(印)印(印)を(印)換(印)す(印)こと(印)今(印)分(印)り(印)せ
は(印)名(印)人(印)印(印)中(印)に(印)少(印)く(印)て(印)保(印)存(印)す(印)る(印)も(印)亦(印)少(印)く(印)也(印) 七月廿
二の記

○一昨廿の大隈侯を初め毎月一回倒りて書
い(印)ど(印)何(印)ん(印)所(印)ら(印)ず(印)縦(印)横(印)の(印)活(印)字(印)を(印)お(印)ま(印)り(印)せ(印)て(印)ま(印)さ(印)い
ま(印)え(印)を(印)書(印)し(印)て(印)い(印)と(印)云(印)ふ(印)所(印)候(印)早(印)速(印)に(印)改(印)換
あ(印)る(印)差(印)あり(印)来(印)る(印)廿(印)七(印)午(印)後(印)一(印)時(印)一(印)冊(印)一(印)回(印)の(印)活

活(印)を(印)書(印)く(印)こと(印)多(印)う(印)ら(印)し(印)候(印)の(印)坐(印)活(印)を(印)多(印>の(印)使(印>を
書(印)し(印)て(印>見(印>た(印>いと(印>自(印>分(印>の(印>正(印>拙(印>け(印>た(印>こと(印>多(印>う(印>ら(印>し(印>も
十(印>年(印>七(印>前(印>に(印>あ(印>る(印>候(印>又(印>隨(印>從(印>し(印>て(印>枚(印>用(印>ひ(印>出(印>張
し(印>と(印>折(印>る(印>も(印>た(印>中(印>節(印>を(印>取(印>つ(印>て(印>候(印>の(印>右(印>内(印>意(印>の
間(印>の(印>事(印>を(印>書(印>く(印>候(印>也(印>お(印>ろ(印>濁(印>り(印>を(印>維(印>新(印>の(印>あ
時(印>の(印>事(印>を(印>書(印>く(印>候(印>を(印>記(印>し(印>た(印>こと(印>也(印>あ(印>る(印>大(印>觀
雜(印>語(印>を(印>刊(印>す(印>こと(印>多(印>う(印>ら(印>し(印>時(印>の(印>坐(印>活(印>の(印>座(印>活
録(印>を(印>必(印>ず(印>載(印>す(印>こと(印>多(印>う(印>ら(印>し(印>と(印>自(印>分(印>の(印>提(印>換
し(印>ま(印>え(印>ら(印>一(印>行(印>の(印>呼(印>び(印>す(印>も(印>多(印>う(印>ら(印>し(印>保(印>し(印>自(印>分(印>の
欲(印>す(印>る(印>活(印>向(印>と(印>全(印>然(印>異(印>る(印>も(印>あ(印>ら(印>し(印>自(印>分
の(印>活(印>る(印>の(印>候(印>の(印>日(印>常(印>岩(印>又(印>指(印>を(印>書(印>く(印>候(印>又(印>口
と(印>衝(印>て(印>出(印>る(印>活(印>活(印>を(印>逃(印>る(印>も(印>提(印>へ(印>つ(印>ま(印>き(印>とい(印>と

その心あるて、勿論意味のある部分を捉ら
ざるはあすが、一項く物事を捉らざるは随
風な候も、物事二風一と云ふ、**事**字の活
を揚げる、**事**字と系、致向むと無、勿論種
活活の内、目元、動ることの出さる、決して差
支る、一、寧ろ望む所むある、殊更しく
随筆の活活を揚げる、**事**字活活の相見
るも相見せぬ、拾ふも若し、ボス、ソ、エ、カ、ジ
ヨ、ソ、ソ、ソの記、室を、此の文、家、の、咳、き、揚、ま
む、直、ま、し、の、候、ハ、細、事、を、以、つ、て、後、の、天、真、流、霞
の、活、活、の、味、を、嘗、て、見、ぬ、と、云、ふ、の、心、あ、る、但、し、こ
れ、を、わ、え、ん、と、う、と、一、人、の、事、と、あ、る、考、へ、候、の、左、右、二、候

と、拾、ら、る、ぬ、か、り、と、も、候、か、定、を、捉、ら、活、笑、ち、と、も、何
時、の、拾、ら、る、差、支、の、無、い、限、り、其、の、左、右、を、捉、ら、る、心、あ
る、出来、る、い、業、を、あ、る、大、親、の、記、が、候、の、随、筆、
を、活、活、を、揚、げ、り、と、揚、げ、り、の、子、文、を、終、始、左、右、二、候
こと、が、出来、る、り、つ、に、因、り、こ、と、を、も、つ、て、大、親、の
増、田、の、手、紙、の、終、り、に、活、活、の、一、欄、を、唐、し、と、
こ、ん、と、唐、し、活、活、を、と、る、商、略、上、候、の、味、を、成、る
べく、活、活、の、す、り、方、を、切、し、て、**日**の、書、し、た、り、う、が、自
ら、見、ん、は、減、ら、る、意、の、心、あ、る、自、ら、ハ、**日**、**日**、**日**
と、に、あ、る、文、の、場、合、の、心、を、捉、ら、る、活、活、と、も、毎、日
候、の、活、活、を、裁、せ、り、候、の、心、を、捉、ら、る、活、活、と、も、毎、日
と、活、活、を、有、り、且、つ、と、こ、ん、と、を、以、つ、て、他、の、候、の、活

其を編む時の材料、又ちん中のと終る候に、治めし
 其許を得るのむつに、候のたまきなる議論を治め
 るも、治めざるも、揚載せざるも、かゝるおのゝりも、他りも、治
 る方法も、ある。但し、随時的の治めを、保し、主
 か、んが、治り、扱が、無い、全体候の、長所を、飛論
 あり、と云、りん、ら、と、治、候、と云、く、候
 の、候、なる、真面目、と云、日、の、治、坐、候、ある、の
 び、其、の、致、味、も、こ、い、の、さ、る、の、し、ある、候、の、飛、論、し
 互、派、ある、もの、を、事、し、ら、る、の、候、と、い、の、論、論、を、な、す
 七、の、せ、ら、れ、七、他、又、人、無、き、は、限、り、候、の、治、候、に、於
 て、は、真、に、天、下、の、一、而、也、何、人、も、及、ぶ、七、の、と、無、い、ま、ん
 う、治、し、治、し、ま、き、治、し、し、ら、ん、と、煙、試、に、附、さ、る

このまゝあるも、惜しむべきもある。今、今、候に、治めし
 ろい、治めし、と、治、又、し、ら、の、し、候、の、特、も、を、成、さ、る
 その、ま、ま、く、治、ま、ん、と、し、ら、欲、す、ら、ん、と、い、ふ、は、ど、う、せ、候
 候、治、め、し、七、治、を、引、き、出、さ、ぬ、ら、ん、と、い、ふ、ま、ん、と、い、ふ、は、ど、う、せ、候
 為、の、よ、と、聽、者、七、十、人、位、無、け、ん、と、い、ふ、候、七、張、合、え、ら、ぬ
 か、ら、う、又、十、人、の、聽、者、の、由、り、と、行、く、の、治、め、し、と、す
 る、七、の、七、お、の、り、の、治、め、し、と、い、ふ、は、ど、う、せ、候、但、し、七、十、人、も
 今、の、治、め、し、候、治、め、し、治、め、し、出、入、する、内、輪、の、七、の、治、め、し、
 を、治、め、し、候、に、對、し、治、め、し、の、無、い、候、と、い、ふ、甲、乙、と、い、ふ
 お、の、り、の、治、め、し、候、七、退、屈、の、折、柄、と、い、ふ、此、の、治、め、し、を、治、め、し
 二、納、め、即、刻、所、謂、も、寛、ろ、い、治、め、し、を、三、十、人、分、計、
 七、者、九、く、わ、あ、り、候、治、め、し、七、治、め、し、と、相、平、な、さ、る

九比、まゝの如く、意味が、大親に揚げられた
る、殊更、い、話と、と、致、し、つ、て、自、分、の、注
文、し、ひ、と、く、掛、つ、る、也。

あ、の、の、話、法、を、讀、み、早、大、文、科、出、身、あ、る、革
記、と、を、見、え、比、が、少、く、趣、ま、ん、だ、成、功
の、見、込、が、あ、る、

(七月廿二日録)

又、同、今、ま、二、年、前、大、隈、侯、の、御、に、困、し、ま、る、
こ、と、を、一、日、侯、と、訪、し、い、候、の、を、所、を、懸、え、
以、見、且、の、世、の、め、め、二、種、の、御、と、毎、日、御、と、
人、お、う、候、の、計、あ、と、今、所、に、成、り、し、ま、く、一、
候、と、候、な、ら、う、話、し、七、人、の、ま、う、せ、し、ま、く、今、代
と、人、を、記、し、ま、ん、と、恐、ろ、し、ま、く、侯、の、ま、う、せ、し、ま、く、

ま、う、と、ま、の、候、の、因、意、を、得、ま、る、由、年、の、つ、
と、或、人、を、月、次、の、開、き、つ、て、ま、う、と、文、明、館、の、
茶、張、屋、を、う、候、又、か、ら、う、説、く、し、ま、く、大、
親、旅、徳、を、見、行、し、つ、て、あ、る、は、ら、し、ま、く、其、の、編、輯、會、
を、月、次、の、候、の、邸、に、於、て、開、く、を、例、と、し、信、も、
御、見、其、會、に、出、席、し、種、々、法、論、を、し、し、を、以、
つ、て、別、の、一、會、を、つ、ま、り、も、好、い、し、き、執、り、あ、ん、
と、又、今、ま、の、候、が、今、ま、の、候、に、つ、ま、り、こ、と、し、ま、
る、也。

○新、は、み、車、の、原、郡、五、十、崎、の、入、後、を、(未、可、
り、其、の、由、を、あ、る、餘、書、の、由、の、遺、蹟、を、終、
の、あ、年、の、志、氣、を、故、多、あ、す、る、云、々、の、科、書、を、

七三さんと云ふ余の意見を徹し来る。余を一二の説
を改む碑を改の刻する可也。但し縦令原碑
を滅すも其を保存すべしと教ひ之れ又附属
する薬師堂を修築するも其の形を
徹りて修理すべし。今又大規模に建てる可
くは無用なり。堂あり別々令修する可し。近年
の人多くの便を圖ふ。元も修す事堅牢を以
て且つて其多くの人を容んぬる校土間々
しむと改む。此法を中中洋信は其の意に
あつものなり。今と其意を其の教諭
を執り其意も是なり。近き其
世史の根をの確定と一部始終一応関する

車末文公守南嶺焉隱中田之墓以別蘇妙音重武寶山岐翁正津軍衣奮良公
節貞山望苑竹羊太樹軒蘇蘇竹忠貞社香戀其世際由茲希文守羅州華平
善遊之一由冀高踰躑躅忌田味二帝脈瀛回香聞其燠業由羅准竹文翁武
夫繼蘇興類眼刃心體立軒表許眼衆皆懇慕姑主竹對而豈徒前人之墓延
巡鉢風瀛故賦翁正津軍華于地而煇髮軒軒其更各竹不味而燈其翰竹對
輿益瀾澗姑蠶谷呂赫會軒越嗣一飛之川式今豈齋大夫忠實中瀛津公驗
茲河張山寺中竹蘇莖墓墓土古沐一耕今饒許蒸然鼓和蘇燕賦其益各津刺
鐵河雷越資其越其莖資益皆其翁胤山越對陝蘇胤瀛小川張蠶谷呂竹寺
園天民業兼蘇輿山刃三民業如升出限个亥蘇田越其對蘇胤竹越對圓卅蘇

のふたりの役を固くして、たゞもつたまに、
 と、思つて、おのれを、人に、容れ、た、
 故、土、前、の、
 世、史、の、根、を、の、確、定、と、一、部、の、
 一、夜、閑、ま、

を、氣、う、
 近、其、
 世、史、の、根、を、の、確、定、と、一、部、の、
 一、夜、閑、ま、

鎮守府將軍平維茂碑並銘

弘文学院學士 林 恕 撰

詩曰赴武夫公侯干城故良相治內良將鎮外外不靜則內亦不治此所以武夫爲干城也有干城之人而後邊虜不能窺中原塞垣草木知威名此所以邊帥爲重任也 本朝之古皇化之盛教令光被四表然與羽夷賊屢據險方命是以歷朝開鎮東之府置鎮狄之軍遣征夷之使設按察之職皆擇其所謂鎮守府將軍平維茂能堪其任者也維茂者其先出自 桓武天皇天皇生一品式部卿葛原親王親王子曰高見王早世不顯其子高望王始賜平姓出任上總介高望多子曰良望曰良將曰良繇曰良文皆居東脫簪笏而爲爪牙之士相繼任鎮守府將軍支族蔓延分處關左諸州良望改名國香國香有二男長曰貞盛乃是大政大臣清盛祖也貞盛弟曰繁盛繁盛子曰兼忠乃是維茂父也天慶年中貞盛與藤秀鄉誅戮凶賊平將門功名蓋世任陸奥守兼鎮守府將軍以甲東方而擇族類勇敢者養之爲義子以序其齒有太郎二郎以下至十郎之行而復叙其餘維茂生而剛勇然年弱當第十五故名之曰餘五郎貞盛卒後維茂留戍與州州民皆知其健強 一條天皇長德元年之秋羽林中郎將藤實方遷陸奥守維茂等重其貴族來于遠方而推戴唯謹州有猛士曰澤勝諸任藤秀鄉孫也與維茂抗衡有隙且采地連接爭田交惡訴於實方實方以二士共驍勇故憚而不斷之唯慰諭而經年未幾實方易管二士彌相矛盾遂約刻日挑戰而互聚其黨維茂兵可三千人諸任兵可千餘人諸任慮其不勝而避之赴常陸國維茂笑曰彼何怯之如此乃散兵不備焉諸任聞維茂壘虛乃潛兵銜枚襲來攻之事出不意維茂兵甚少僅在者皆戰死維茂乃匿其妻兒於屋後之山而自防之慮不敵而退放火於壘投衆骸於前池維茂亦混臥其中諸任繼至而謂維茂旣死而扑躍騎馬而去或人說諸任曰餘五匪直也不見其首則我心不安諸任曰我自督兵環攻而鑿之雖飛鳥不能脫焉況於人乎諸任旣去維茂擡起脫其衣換着女服懷刀立藿葦之中猶窺諸任再來也旣而維茂部下兵士五十餘人競至見其壘之燒相泣曰我輩居遠不知寇之急令我君不免厄悔之無益吁奈之何維茂突出曰維茂在此維茂在此汝等勿憂衆皆下馬歡拜維茂曰計寇兵可五六百人今汝等雖來僅五六十騎然兵道之勝敗何必多少之謂哉想彼必驕情解嚴今速擊之必其克焉汝等謂何衆皆曰彼勝我敗彼多我寡其鋒不可當焉不如暫待他境族類之聚而圖之維茂曰不可也我不死戰而匿池中者爲士者之奇策也若延數日則不免棄地逃亡之疑是勇士之所耻

干城之人而對靈輿不謂靈中靈塞草木賦靈谷地也靈輔靈重山也 本障之古皇山也
精曰掛掛瓦夫公封干城姑身卧尚內身謀難於於不謂限內衣不尚此也也夫公干城也

近文詞學士 林 懋 對

巖寺祖澤軍平難茲輯並繪

也汝等不從則我獨往死耳乃策馬而馳衆皆從焉又有追至者都百餘人諸任誇勝而行數里
憩於河畔饗群士維茂兵馬如飛直至其幕前諸任驚騷從軍周章維茂急擊殺數十人諸任敗
走維茂追而射殺之乃斬其首徑進入諸任壘焚之留守者不能防焉維茂令曰爲勇者皆斬之
爲女者勿傷焉遂悉殲之獲諸任妻護送於其兄之家衆人皆曰餘五可謂勇而兼仁愛也由是
維茂武威聞于遠近 朝廷登庸之任陸奧守兼鎮守府將軍爲東北藩屏時人喚曰餘五將軍
國內平而夷虜服矣所謂公侯干城而塞垣如威名者乎俗傳維茂曾過信州戶隱山盜賊等僞
假女粧誑維茂又被鬼面劫之維茂擊殺之其餘事業及史之闕文不能抄錄焉然以諸任一事
推之則其勇智善謀可類而知之實是方面之良將平族之翹楚也維茂長子繁貞繼父業鎮東
國次男繁兼稱奧山氏三男繁成任出羽介戊秋田城其後移居於越後國世稱城氏爲北州渠
魁所謂城資長城茂城資盛皆其餘胤也越後州蒲原郡小川莊巖谷邑有寺號平等傳稱維
茂所建也寺中有維茂墓墓上古杉一株今猶存焉然遠時移無知其爲名將陳迹者越後與東
奧爲隣境故巖谷邑隸會津城隔一派之川方今通議大夫虎賁中郎將源公鎮會津城使群吏
巡檢屬縣始知餘五將軍葬于此而欲建碑傳其勇名於不朽而徵其辭於僕僕不能不應其旨

夫繼絕興廢則民心歸焉立碑表行則衆皆感慕故生於後而追封前人之墓或立碑或建祠者
善政之一也漢高祀魏無忌明和二帝祀蕭何者問其勳業也蜀郡於文翁九江於召父者慕其
循良也墮淚於羊太傅碑植花於卞忠貞塚者感其功烈也范希文守嚴州尋子陵之後奉其祠
事朱文公守南康訪劉屯田之墓以限樵牧皆重先賢也如餘五將軍亦奮勇於登時貽名於後
世則是亦非常之人也今遇此盛舉而一抔之廢再興巨石之標新立則古杉一株之青與彼岳
將軍墓上之松同色如見英雄未死之心於數百歲之下者乎嗚呼公之封於此率由舊章施行
善政在餘五將軍則沒後顯名之榮何以加焉既記其事繫之以銘銘曰

皇胤之分降列武臣養于伯父勇絕等倫戰克鄰寇勢壓邊塵如隼逐雉毳鷄仰望北闕鎮
守東濱五馬風嘶三尺霜新光弼之嚴亞夫之眞長星雖墜威名不泯爰尋遺蹤追思其人拂開
榛塞墳草向春

寬文八年戊申三月五日

正四位下左近衛中將會津城主源朝臣正之立

明治四十年丁未四月八日

岩谷山平等寺現住 猪股 悅禪印施

七喜さんとその余の喜見を徹し来る。余を二一の説
を改む。碑を改の刻する可也。但し従今を原碑

遊之暇其更嘗善藉可讀而賦之宜景四面之良襟平越之曠瑩出辦莖其干潔
遊之暇其更嘗善藉可讀而賦之宜景四面之良襟平越之曠瑩出辦莖其干潔
園内平而夷瀨淵矣汎臨公對干城而塞垣賦瀨谷香平谷粉辦莖會盛計欣可
辦莖其干潔遊之暇其更嘗善藉可讀而賦之宜景四面之良襟平越之曠瑩出辦莖其干潔
爲文香心書誥參悉懲之辦莖其干潔遊之暇其更嘗善藉可讀而賦之宜景四面之良襟平越之曠瑩出辦莖其干潔
去辦莖其干潔遊之暇其更嘗善藉可讀而賦之宜景四面之良襟平越之曠瑩出辦莖其干潔
懸然所和響。辦莖其干潔遊之暇其更嘗善藉可讀而賦之宜景四面之良襟平越之曠瑩出辦莖其干潔
出必善不。遊之暇其更嘗善藉可讀而賦之宜景四面之良襟平越之曠瑩出辦莖其干潔

おありのそら夜あり、その内而るんことを約す、

○此方の日暮氣をと多御、地えそ也、毎る有物を賞
ひあつえし、探轉んび、未小觀漢するん、此頃の
中行す也、そのも涼味ある午前、こ外出んも
のち底と過う、二三例考、和既の方を遊ひ、こ
ちのその是れ過う漢み、偉ん書、其を
と得たり、其れ和既既考るん、こ近既り多る
す、その精ひ入ん、其れ友乃の笑、記、其居
立去の枕の山、東花坊の夏ころも、契沖の
漫吟集、其れ法、其れ山、朱然、オ、其れ
其れ其れ考るん、其れ事、其れ其れ其れ

の青うら、室長の枕の山と梅三つ首を仰し、
 花坊の夏ころも我に紙に坊う行脚の時の
 句集也、朱紫之流向の過も、もさあへさかの也
 横高の香山いさむい何人するを、
 ハ道詣深き人と見え、契沖の漫吟集及日記共
 二作本也、漫吟集と後集をもちも、
 龍日初撰本也、近來者物拂處、
 容れ、年々入る、念心の者の年々入る、
 んと、銘夏の具を得る日也、人若し余三
 を、洞小古の、は、未見の、在書を得る、
 リと、文へん、
 (七月廿六日、
 十二

の山田正平、支那、遊び、家刻の、
 地の二款、
 木印

木印

雅鬼大印



今、
 前、
 今、
 今、

此書又坊本：名山御案記（唐本四十冊）
系：程本所墨帖と得、十巻所墨帖と
天保癸卯十一月半和島藩井花本摹写刻
する所は下山偶成を首頭以下唐人の
語を行書体三考し、その味を
撰すべし。名山記又此本あり得べし
山形癖ある余の架中一本無き能はず、
價を論じし購ひ入る、所以也

大正九年七月廿九日誌

○釋ハ黃紙ニ屬シ印ニ款成シ朱字の布置、昔
心し三四彫リ成りたるを、春ハの二字をあしく
小し、承く布字折念々と云ふ、余の名字印



二二五五紙の成
印しる七の成
二二稿：成印に
庶幾し

大正庚申八月
三日

○高橋心左衛門景保の著ハしる漢字の葉の原をハ
帝大圖書館ニあり、此本之れを摹写版一巻あり、辨
て二二五五、五十七枚あり、其書ニ景保の漢文
研究ニ関する事蹟を略叙す可し

本書ハ高橋心左衛門景保の著なり、景保の著を

實基といひ有らざる数々家高橋作左重の至時の長
子より天永四年の生れ、文化元年二十一年の父に継
いで幕府の天文方なり、文化八年より天文廿五年、甘
耜親海局を没せんと、大槻親元、日盤親元、宇田川
椿二重と、お前後して出仕しければ、景保元等
の人々に就て甘藷子と傳へたり

文化元年西五、使を考して通高和親を以て、
その考海島文と清文とを以てり、茲に松尾景保
の清文の方簡を景保に附して和訳せしむ、こ
れより先、邦人として清文を解すること未だ有ら
ざることをり、景保即ち秘庫の清文鑑を借
りて自ら拮据研讀して遂に之を和訳し上り

所謂西五西四呈書満文強解、これよりいふま
景保の獨創、自らに係るものなり、近きを以
て、蓋北際満字と漢ハ斯人の権輿了之と
すべしと、贊ちるもの宜らうといふべし

景保の満文強解の成り、文化七年九月より、景
保清文鑑を其として、満漢字考を編て、文化
十年其の景略成り、その中三十巻計あり、その
二月廿三日天文方役定まり、火を焚き、貴帝を
出、其概多く焼失し、その形も七まじり、鳥居の
中、然るも景保志を瘞せり、更なる奮勵し
再行を記し、文化十三年三月成り、これ即ち
満文輯要、一と首一卷本文二十六卷合せて

十八冊とて、現に内閣文庫に之れを蔵す、同年八月
滿文敬語解二卷成る、元滿語の文典なり、別に
増訂滿文輯款十一冊、清文體名物語抄六卷
あり、何れの内閣文庫に之れを蔵す。

本書の四巻を火付くも、多のんしうきをそとの山家傳の
若くしことめわうして恐くく自著せしむらん、而してこの
書り成りしは文化十年滿文輯款の初巻の燒失也
し、年々この書者のんしうきしを修り判りしをわ
べし、本書を初巻のりるに成るの者なり、滿語抄の
しよまのんきしをわらう、此二のりる文を抄略したる也

(以下略す)

八月九日誌

○三本涼氏物語書入廿八冊年入ふ、んを離壇用の書也
体裁の異なる者と同し、格別珍しきものあり、あつて、自分
が寸珍をそとせしむる、如くし、既三二年年書をそとせしむる
何れ、この年入ふ、最早の年入ふ、無んとする、此の紙
流りたるもの、年入ふ、紙の流りたる、此の紙家に入
たる者、此の年代に、付、價を高く、そのを漸やく、紙ひ
ふ、し、を得たり、余し、甲斐文あり、そのを漸やく、紙ひ
ふ、し、を得たり、版式とも異なる者、と酷似する、分、同、代
又恐く、同じ版式なり、涼氏物語の、一冊毎に、一枚の、紙
あり、草紙、紙を、若く、修補の、意あり、と、い、曰、
の、よ、也、價、二、冊、也、別、一、冊、也、
八月九日誌

○肥田の州鳩先生集の、入る、三十三、回、記、念、今、今、今、

ハラシコトヲ切望仕候 敬具

尙當日ハ御遺族肥田野嘉吉君同祥君ニ於テ先師竹塙先生及息金洲先生ノ建碑式ヲモ舉行セラル、筈ニ御座候

大正九年八月一日

發起人

- | | | |
|-------|-------|--------|
| 富永孝太郎 | 竹前辰正 | 松田八郎 |
| 白勢和一郎 | 清水中四郎 | 田宮從義 |
| 香川鍊彌 | 澁谷民吉 | 田中八千代 |
| 坂上達 | 長谷川昌敬 | 式場幸平 |
| 上野喜永次 | 長嶋晴耕 | 片桐辰二郎 |
| 毘田文二郎 | 澤 式 | 中野卯三郎 |
| 安倍隆吉 | 伊藤柔庵 | 肥田野才之丞 |
| 遠藤恭三郎 | 谷川俊三 | 渡邊嘉緑 |
| 梶 靜三郎 | 下 孝之助 | 伊藤建七郎 |
| 佐藤龍太郎 | 國井慶太郎 | 稻垣島太郎 |

此の書は膝に接し格と追憶の情林あり得るものあり
 来月十二日執行の追憶多しと事許すは夫も
 七九左も七九右の遺書を授け七九微懐を表せん鳥
 鬼智は早く、先師の三十三回忌を設けしき五又漸
 々志を定め、感慨あふれんや 大正九年八月廿
 〇盛暑を過す日、雨に余りて此を多御を授け、折柄、
 一石を擲くすまの骨董品あり、その石は茂のま
 ろにあり其形親方の子を抱きまつて似たり諱祝ま
 しの石を思ふ、高森村里の遺書ありてその
 余は遺書と石を同く、石を石とす、毎に石を
 不用の籠と出つて、購ひ入ん、机上に置きて
 相親しむ、時々新書すまの石、えん以て石を、此

し、石碇と筆もなる冬の碇に傷る筆にさうゆつて九月
十日志る事、

の遠る水くぬきしうき勢をこころんかつる、地く
うたを午睡の枕のつげも睡えが、あまの
あつて月を雲集をとりてをば、海石におちし
くおふゆもあつ、みぢうにわし一と心とせの
八月十日志る事

漁夫

羨るしと相くあつてのそつな

悼ち海ニ

あつてのそつな家のあつてのそつな

燈

下部寺の燈くハつてのそつな

燈のあつてのそつな

あつてのそつな

悼吾子母

あつてのそつな

あつてのそつな

おね

あつてのそつな

惜物

あつてのそつな

蠅えちき想ふ心よ手来り
顔うつく飯粒饅ふあはく
うら歌くま傳りて
しをんとし外よりえ、の飯を

松素

甘洋の實もつさ記すし水驛カマヤ

社殿式部の不塔

蚰カマヤの七に其然ききうううう

かまらの涼

ある水の行く水汲かすくみだ

目玉の流

度しむが心の塵を志あづい津く

比伊咄中の節水
しんしんを道まむ出るふ山節水

閑長

度る身もさげん似や秋の風

寺のそと

常陸や聖女なこうんきりくす

二露

あのみあまねひあけよ不夜の玉

夢のよ〜似る甚むさ登巻る

大文字の句を求ぬんえ

雪のこゝ海の出けりまこり

山の端と雪も見えや大文字

秋暮

接し地又接し又も秋の暮

月

名月や烟遠ゆく水のうへ

七や釣やみ村山部酒旗の風

琴

琴も音も響く東はうららかに離るる

梅

ふ見一編一つらんをよみあはれかた
梅干もやえ紅つて花さう梅の花

美

花も風かろくきそふけ酒の泡
花もを出て移くもみよはあま

新志山入の境

あまこくこき分おとすう山さくら

権系かききそ見えは入る

さえこつり又おとすう山さくら

やんとお枝葉も詠物の情

もあんな人よわに

あつしき中もあまあつしき

ふも木もこ

あまのうらみ七鳥よとらしし
鶴の羽

福村ヶ崎

正月廿七日舟し海の上

望花

吾の如き：吃ちて馬のうま

雪

花あくと 恥なる雪の光の子

三

○寸冊を新刊の山田教域：郵送し得去の次第を
認めんとしおく。教域一往由龍の和紙を
うすまわ物屋寸法加中。若干の字をあらう。中
友人の字しんはも三四字。教域のしんはかくて一也
ウリ藤井利彦は、花心集とをも題するんは物

一巻の目録中又五入題。花心と教域の雅語也
○淵：兼しと名山勝景記四十冊の題箋を作
亦花心記を捨す。新購の圖書：印記を捺し、捺
写を心すと好書家の一快也。余前々泰山志を購ひ
讀りて此書の念動き名山記を購ふんとし、書
肆と漁り、しり此種の圖書容易に得べしと漸
やく一部を得んぬ。且日本書屋より、装釘又壞
れて修るべきあり。乃ち花心記を補ひ、各紙に入紙
し、表紙を換へて装釘をせしむ。幸に一函の之を
と納りしは寸尺の合するものあり。こゝに漸やく日本
自体を力をも得たり。然れども修納の爲三十冊を
投し、原價五十四許のもの八十四とす。

其の思ふ所なり
○狀元も斯くせんハ親関に便らざる或は他日自本
日命し悔を為す事あるハ但此余が性其難の
者も存するを欲せざる也。此方何振卿の編する所
王世貞の序あり流布本巻教區より余の製本
の際念して四十冊とするものと云ふ。八月十日記
○余の意園の池邊に一葉の葦葉あり枝葉行

秋洲



是の印家

織細書と六尺に満ず而
して花より雨の思へハ垂下
ハハ念するハ魔杖の野城
張澤の答ありて云ふ
手れを賞す余も亦甚れ之を
愛す为りて一印を施せん

秋洲の因に一葉の葦

と、いままの類を定めて偶々印の迹を檢するに
遇所刻する所の関防あり文云秋洲の鈕に
刻する後後辛卯年の日を原め春庵四十年
所とあり春庵のいままの印を知る事と表
の檢るも余の爲り刻するもの似たり余の秋
洲を別號とす且つ此印を用ふ。八月十日記
家庵の印も昔昔湖刻する所の翠原の一點
り親族近念氏の印も蓋し御里知原の名
を取らざるを翠原らしと見えたり余も亦
名を出生の地とするを依りて往々此の印を用
ふ人目して余の號とす。秋洲を號とす
るも此類也

○カ物々全架中の寸珍を一部に印すは巻者印

甲

乙

小精虚押
架寸珍書
千種之一

小精虚
寸本千
種之一

十二文字

九文字

カカ空めす、印の

大き、さハ、大略 □ 此位よりいふ、寸珍を二部して油
和せり、而して細刻甚比容易なるを、随つて印面
文字甲より多きより乙と名も又多きより乙と名
或し、為一考を要す

○寸珍書畫依一を講ふ、首部に王紫詮の題字
あり、秋月桂樹の三枚に亘つ細字の長字命あり、

十二文字

後、未だ以の者体こ、^{東洋}不野持の詩一紙あり、外又

三四の書画あり、^三三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

三刻き取り、^四四刻き取り、^五五刻き取り、^六六刻き取り、^七七刻き取り、^八八刻き取り、^九九刻き取り、^十十刻き取り、^{十一}十一刻き取り、^{十二}十二刻き取り、

伊勢に於て

五
支那に支那程大なる習慣はあるまい。これが自分の支那観である。また人にして支那を問ふ者あらば自分は斯く答ふるより外はあらずと思ふ。

支那の國土の大なるとは、今更云ふ迄もないとある。
先づ汽車に乗つて見てもさうである。一日汽車に乗つて、終日他を乗りつて居ても、處に依つては、一山をも認めない處がある。又一河をも見ざる處もある。實に際涯もない、廣々たる平原で、僅に一部を經てみた丈でも、何人と雖も支那の大なるに考へ到らぬ者はない位である。

あるが、多くの場合に於ては支那の文字と日本の事實とは、しつくりと合はぬ感がある。

支那は非常に大である、日本は外に小である、極端に大なる國の文字を持つて来て、極端に小なる國の事實に當はめやうとする、其の合はぬのが寧ろ當然である。只日本に居つて聞いて居ると、世界列國が支那のあちら、こちらを租借して、要地にはそれ／＼列國の國旗が樹てられ、幾と分都すもされて居る様に思はれるが、さうであらへ行つてみると、如何にも隅々の方へ只僅の外國人が住んで居るといふ位のもので、大局には何等關係がない様な氣もする。

支那漫遊談

市島春城氏談

支那の前途がどうなり行くかと云ふが如き問題になると、自分は勿論論断しなぬが、率直に支那人と雖も支那は五十年か、七十年か、十年位の間を要すると思ふ。事實支那の政治の要路に當る人達からして、支た丈であるから、此先四十年はかたの前途については、はつきりしな考へを持つて居らぬ様である。

革命は在外早く蓄積がついて居る。これにはいろいろの事情もあつたであらうが、一つには國が小さいにも據るのであつて、十年位の間で片がついたとも云へる。

支那の革命は起つて以來既に十年を経過して居る、然も今尚混沌たる状態にあるではないか。それ國土の廣さより云ふ時は無理もないと思はれる。支那の廣さは凡そ日本の五倍にも當る、日本の革命が十年で治まつたとすれば、支那は五十年か、七十年か、十年位の間を要すると思はねばなるまいと戲談半分には云ふたのであつた。

にしても、此學問の中心に對しては、神聖にして冒すべからざるものである。日本の此特殊なる國情は、日本の革命をして早く成就せしめたる所以である。

此點は日本と支那と大に異つて居る所である。日本人は國權に當る時は、己の利益を全く度外に置く氣味がある。凡そ國家の爲に遊氣を奉還せよと云へば、直に海に投じて居る者である。

支那漫遊談

市島春城氏談

之が爲に、描かれたる國の方針は、すん／＼運びて、維新の革命も、世界に類のない程速やかに、且つ立派に成就したのであつた。

支那の如きものが、各地に割據して居る所を示して居つては、中央政府は如何ともするに出来ない。如何に新進の政治家があつても到底何事をも得ざるを當然とする。

支那の如きものが、各地に割據して居る所を示して居つては、中央政府は如何ともするに出来ない。如何に新進の政治家があつても到底何事をも得ざるを當然とする。

支那漫遊談

市島春城氏談

支那の各地に散在する軍と稱する者は、一面より見る時は中央政府の大將を各地に配置せる様になつて居るが、其實これが割據の狀を呈して居るので、恰も徳川氏の末路に當りて、薩摩なり、長州なりが一方に蟠居し、動もすれば中央政府の命令を聽かないとがあつても、中央政府に於ては如何ともしがたく、手の下し様のないのと同じである。

支那漫遊談

市島春城氏談

支那の各地に散在する軍と稱する者は、一面より見る時は中央政府の大將を各地に配置せる様になつて居るが、其實これが割據の狀を呈して居るので、恰も徳川氏の末路に當りて、薩摩なり、長州なりが一方に蟠居し、動もすれば中央政府の命令を聽かないとがあつても、中央政府に於ては如何ともしがたく、手の下し様のないのと同じである。

支那の如きものが各地に割據して居る所を示して居つては、中央政府は如何ともするに出来ない。如何に新進の政治家があつても到底何事をも得ざるを當然とする。

支那の如きものが各地に割據して居る所を示して居つては、中央政府は如何ともするに出来ない。如何に新進の政治家があつても到底何事をも得ざるを當然とする。

勿論今度の内戦も決定的なもの
あらざることは云ふまでもないが
の如き小せり合がしばしば起つて
遂に何れかに決する者であらう
(先生の此話は去る十二日朝され
たるものである)

◇重角支那の戦争といふものは、
日本の如くに真面目のものとも思
へぬ、まさか芝居や任言で行つて
居るのではあるまいが、乍去、忽
ちにして争ひ忽ちにして和すると
いふ有様で、極端極まりがない。
今度の騒ぎも、其の心持で見て居
るべきである。

◇大きい範圍、大なる土地のうち
ではあるが、此の如きことくが
しばしば起つて、それが纏まる方
の導火線になるか、或は次第に國
を破壊に導くか、自分等は不肖に
して其測量もつかぬ、これを支那
の政治家に譲つてみて、確たる答
へを得ぬ。

◇不得手の政治家は、慥くさし置い
て、少し別な方面に亘つていさ
か云々してみる。

◇前にも云ふ如く支那は國土が如
何にも大である。其大なる國土の
上に經營する、土木事業の自ら
大なるものも、怪むに足らない。萬里

支那漫遊談 市島春城氏談

の長蛇の如ききはそれで、如何に
も大きく見えて、萬里の長城は三
歳の兒童も尚ほ能く知つて居る
で、自分等も子供の時分から學
んで、世界の一番大なるもの、標本
として教へられたものである。

◇大抵物と云ふものは、先づ想像
してみると凡そ其の想像が當る
のである。大きなものであらうと
想像しつゝ、さて實際に臨んでみ
るとそれ程ではなく、想像より小
感ずるとが多い。

◇處か支那へ行つてみると全く想
像が遙かに及ばないと感ずる場合
が少なくない。(魚川)

◇先づ有体に云ふならば、精細の
末路に於ける此の如き建築美術は
如何にも俗悪のものであつて甚だ
感心はしないが、只其規模の大
なら、大仰なる形容詞を以て云ふ
たかと思はる、程である。(魚川)

◇古の阿房宮は詩に詠せられて
ある所をみると、なかく、宏夫の
ものである。或は詩人の誇張では
ないかと思はる、位のものである
が、今日の萬壽山は古の阿房宮
より、更に一、二、規模の大なるこ
とが知らるゝ。先づ其機關と樓閣
との間に在る廊下、詩人口調で云
ふならば幾里もあると云ふたい位
である。だん／＼上へ登つて行
くに従つて地形を利用して山上に樓
閣を築き、實に人力を無視して造
られたと思はるゝ程の大經營が施
されてゐる。

◇俗悪にして見るに足らざるの感
はあるも、萬壽山は事實規模の大
なるもので又景勝を占めたる地と
ある。萬壽山の中には實に大なる

支那漫遊談 市島春城氏談

其城壁の上へ登つてみると、如何
にも幅の廣いのは驚かされる。
城壁の上である林といふ感が起
ぬ程である。十四五匹の馬を一列
にならべて走らせても、また十分
餘地がある位の幅の廣さのもの
である。

◇此城壁は、到底普通の砲力にて
は打ち得るものではないと、或
は砲撃家がいつたのと云ふあるが
此一言を以て推して水道門に
なる城壁の大、それより更に萬里
の長城の大きさが想像さるゝて
あらう。

◇支那に於て比較的小なるものは宮
殿である。小といふても萬里の
長城に對しての語である。此比較
的小いと稱せらるゝ宮殿も、恐ら
く世界の如何なる帝室の宮殿と比
べても、これ程大きい、大規模の
ものはあるまい。支那の宮殿は確
に世界の最大當量の一に數へられ
得る。

◇いづれの國、いづれの時代に於
ても、帝王の道樂は土木とせられ
てゐる。そこで支那の如きは、最
大の土木道樂を帝王がしたものと
云ふべきだ。自分は五日間北京に
滞在した、而して禮より夕迄日々
見物を賞す。それは昨と違ひなく

支那漫遊談 市島春城氏談

ふとは、日本の爲には驚き辛ひ
あつた。

◇御陵即ち廟の陵墓にしても、
日本の帝王陵墓とは到底比較にな
つたものでない。其靈を埋めて
ある土饅頭の形に當る處に、幾
十となく樓閣が築かれてゐる。而
して樓閣は皆山の高さ、庭の廣
さと平行して造らるゝと云ふ有
り、大規模の理想もつかぬ位
のものである。

◇支那の天子の土木道樂と云ふも
のは、恐らく世界に並ぶべきと
すべきものであるに相違ない。

◇いづれの國の帝王も國運の盛
なる時には、誰しも此の如き道樂
に耽らるゝ。これは帝王の通有性
である。然るに振り返つてみると
畏れ多いとはあるが、我明治大
帝丈には此御道樂があらせられた
かつた。僅に一二の離宮を造らせ
給ふたに過ぎない。それすら餘り
お好みにならず嘗て行幸された
とのない離宮もある位であつた。
此一事からしても我々國民は、先
帝に對しては崇敬の念を深くする
次第である。

◇此萬壽山の離宮へ西太后が行か
るゝ時の有様と云ふたらば、實に
驚くものであつたと云ふべきだ。

のであるかといふことを、ざつと
形容してみると、自分等は五日の
間毎日此宮殿に入居して居つたと
いふ丈で、凡そ其大きさが判ると
思ふ。

◇此宮殿の中には大きな泉水があ
る。而して其泉水には、北海、中
海、南海といふ如き、如何にも大
なる意味の名稱が附せられてある
勿論名稱は大に過るが、此の如
き名稱を冠する程をこれ程大きな湖
水とも云ふべきものである。

◇此三つの湖水のある處は更に區
劃を設けて、北海に在る宮殿は外
人の見物を許すも、中海、南海に
在る宮殿は、今總統府と國務院と
に充てられてある故を以て、外人
には見物を許されないと云つて
居る。

◇自分丈は特別の待遇をうけて、
此中海、南海にも入るを許されて
宣統帝か西太后の爲に幽閉された
といふ、其島の形、瀟灑の上に
作られたる樓閣や、眞世凱か帝王
を氣取つて居つた處や、袁世凱か
死に臨んで次の大總統を指言的
指名しそれを石室を築きて金庫
中に入れて納めたと云ふ其物や、
支那全土第一の名物とも云はれて

るので、支那には堤防がないとい
ふは妙なことであると思つたもの
である。

◇それが今度始めて支那へ行つて
その實際を云つた。なる程支那に
は川の支流もなければ堤防もない
事實堤防等を築き得るものではない。
非常に川が大きく、その氾濫
状態は見ないから知らないが、あ
れては一湖氾濫する時は人力の能
く及ぶものではない。如何なる
堤防にても堪へ得るものではない
といふことが、實地に臨んで始め
て會得された。

◇萬里の長城、今度の旅行では
自分は見なかつたが、萬里の長城
の起點となつて居る山海關は、汽
車で通つて知つて居る。自分の乗
つた汽車が山海關を通つた時は、
夜の九時頃であつたらうか、只
高き夏の月が輝いて四面模糊たる
中に、長城の首の一端を窺ひ得た
に過ぎなかつた。併し乍ら、長城
のどんなものであるかの凡そを想
像するとは困難でなかつた。

◇北京ステーションの附近に水道
門といふがある。其門の左右に聯
なる城壁……此城壁の首は萬里の
長城程は大なるものではないが、

池、大なる湖水が横はつてゐる。
支那の如き水に乏しき處に斯る湖
水を造つてあるのは、帝王の深き
誇りから出たものである。湖水
の上方には萬壽山があつて其上に
樓閣が築かれてゐる。湖水の周圍
には無數に柳が植えられ、其柳の
枝が長く垂れて湖水の面を拂つ
てある風情は何と云へない絶勝と
ある。湖水の中に小島があつて其
小島には帝王を祀る廟が建てられ
てゐる。萬壽山なしと雖も、此湖水と
大小こそ違ひ上野不忍池の趣があ
る。尤も萬壽山の小島は不忍池
の十倍も甘倍もある大きな島で
今こそ寺は建てて其跡を留めざ
るも、恰も東叡山に當る地形の處
もあつて、思へば幾層たる處が少
くない。

◇此萬壽山の大きな土木道樂を見
て、自分は一種の感に打たれた。
西太后か海軍擴張費をこんな馬鹿
なとに用ゐて呉れたからよい様な
もの、若さうでもなく失張海軍
擴張に使はれたとすれば、
我日本の如き、
頭は枕を高くし
て眼とが出來なかつたかも知れ
ぬ。此の如きとに澤山の命が費さ
れ、多くの人力が消費されたこと

岸の軍艦は只渡す限り此湖水の沿ものである。岸に駐留され、斯る暇かなる中を西太后は、五穀を以て移つた朝鮮に乗つて豫宮へ渡らる。實に昔のクレオパトラが非常の勇を極めたる機體で、マーグランドニを運へたと云ふ、其當時が想像する、程立派のものであるとの事だ。(魚川)

支那漫遊談

市島春城氏談

支那には統一がない。汽車も無い。北京へ行く時と北京から天津へ行く時とは貨金も同一でない。貨幣も統一してある。貨幣の不統一なるのは旅行者を悩まし、行く先きの不便に堪へざらざるものがある。支那に於ては眞ッ先きの貨幣制度の統一を期する事が喫緊である。

此附屬の建物はそれ程大きくはないが、茲に一層を喫するのは如何にも場所の廣大なものである。先づ日本に於ては比較すべきものは一もない。東京にて云ふならば青島の原を四倍も五倍もせる程のものである。此廣大なる場所が二重三重の障壁を以て圍まれ、障壁内には石が敷かれて堂々たる立派の路が築かれてある。障壁の外は何百年も斧鋸を入れぬ樹木が生い茂り、其神々しさは驚かへんに、昔て犯されたことがない。神聖が保たれてゐる。天壇にむく時は何となく崇敬の念が油然而生して来る感がある。

支那漫遊談

市島春城氏談

前にも云ふ通り、自分の國は外へ出て外國より振返つてみるべきである。又日本の植民地の如き自分も人傳へては種々なる話を聞いてゐたが、其實地に臨んでみると百聞は一見に如かず、非常の進歩をして居るに驚いた。

青島の如き日本手に歸してよりまだ三年位の新しい支店もある。

併しこれ丈の大きなものが果して帝王の記を爲す爲に、必要のものかどうかは判らぬ。軍艦も入れるとなれば恐らく十萬人位は入れることが出来やう。

全體植民地には一種密着の氣象のあるもので、いづれの國に於ても植民地の發展は頗る迅速である。聞いて居つたが、身親しく植民地に臨んでみて、其著しき發展には驚かざるを得なかつた。

支那の人は植民地に對しては毫の餘地もない。程家庭が縮小して居る有様だ。現に獨逸の捕虜が平和歸つて来て、昔住居せる自分の宅は何れに在つたかと尋ねると、其の速かなるものがある。

内地の如く河から何迄一の型があつて、それに當照めて行くのであつて、いくらか發展進歩を遂げしむる。内地の十年は外形上にはそれ程進歩の跡を見せない。然るに植民地の進歩發展は全く内地人の想像以上であると云ふを、兎に角有らゆることが大陸的一眼が大きい。

内地の人は植民地に對しては少し之に接近して貰ひたいものである。自分は現に白狀する、この数年になつて始めて行つてみて大に驚いた、而して驚いたのは自分ばかりではない。日本の知識階級のうちに、植民地へ出掛けて行くかといふのは極めて僅なものである。疎懶にして行くを好まぬ。植民地とは只人傳へて聞くか、聞かぬ位に止まる。甚だ冷淡なものである。

子供でも、婦人でも、喜んで植民地に出て行くといふ迄に進んだ。なんだか植民地へ行くと思ふしにでもされた如く考へ、非常に辛い、生きて歸れないといふ、くだらない思想に囚はれて居る者もあるが、それが抑もの間違ひである。(魚川)

支那漫遊談

市島春城氏談

植民地生活は内地のそれとは全く異つて居る所がある。家屋にしても多くは煉瓦にて造られ、防風の設備が十分に行届いて居つて、如何なる嚴寒の場合であつても、屋内にさへ居れば綿入一枚でも過ごさるゝ位のものである。内地の普通の家屋と比べてみると、實に天壤をならざる感がある。

公平に見た處で、此人口過多で生活難に非常な苦められて居る天地より、何故踏出して樂園にも等しき植民地へ行かないのであらうかを疑はざるを得ない。

在る諸君は不知不識無稽なる進歩をなしつゝ行く、その點は内地に於ける諸君の同胞とは比較にならないものではないとも語つた。

内地の多数は先づ此に鑑みて、國民の多數は先づ此に鑑みて、進んで行くべきである。然るに、只何となく厭たと云ふに過ぎない。

日本が海を越へることを、をツくらがるのは、長い間の鎖國的積

に入る玩具式のものを四個を楠細工にて漆料の
 色をんことの法文を軟むたか、その又寸法の廿、
 大さうりの五個の追法文を伝乾した、此のうら
 へも豆細工にて、(十一の)
 寸構のペーパーを巻集了るを軟味するも或る
 ぬる家りの何らの紀念をも心づいた、寸構高標
 形に後者のくまどり四五十種をうんく粉
 を入てあうハシにそのと、江戸名物の各種の高標
 を四五十種をんも移るを入て版一七七の
 出来は是れ又千社札の儼め後るの名を
 統所を堅二寸幅三寸程印刷したその七
 皆はあむのむとあるか、うのうるに
 十二

物と主人と軟味を同くするも、
 の寸珍アルバのりもこんも七のが張り込ん
 ら、又あう人うう等をもん、
 魚のり、十六あせ、
 とつうく、面二代(う)の玩具も
 七めあうも、出来は是れ、
 七のアルバ、
 序、出来出来は細るもの、
 七めあう、
 二寸幅一三四分、
 車海道五十三次の海世傳も同く印刷

- 一 天恩孔平碑 市町速尾方
- 一 蝶葉塚
- 一 了翁碑 米尾
- 一 林史高碑
- 一 尾孫二沙碑 大改池寺物撰
- 一 榮山二栗山碑 廣教政典撰
- 一 古笑哲里碑 藤原忠叔撰
- 一 陸井太室碑 細井德民撰
- 一 小野蘭山碑 厚代政撰
- 一 北條霞亭碑 新山易隆撰
- 一 三宅視淵碑 濟美

- 一 宇田川松庵碑 淡竹誓聖寺
- 一 日 榛高碑 中野白境
- 一 日 槐園碑
- 一 實作紫川碑 大概清崇
- 一 利休追遠碑 河保壽
- 一 切支丹屋敷山花碑 間宮士代撰

一 宗淳居士石谷貞治(切支丹征討大將)槐園

市外豊多摩寺
野方村字大塚
蓮華寺
扁款拓本 元川丈山撰也
多摩郡長打泉託寺

二

一六千法

行者 去 解 集 行

一五百法

新 少 須 智 辨

一 千 法

行 者 と 神 皇 文 章 訂 正

して 聖 心 勢 用

一 百 法

タイ 20 年 1 月

か ち 中 紙 一 冊 此 大 陽 信 考 目 録 田 中 浩 田

等 一 篇 多 節 一 冊 註 明 田 中 浩 田

一 冊 和 末 三 冊 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

尚 行 者 の 考 究 二 部 通 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

世 一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

一 冊 史 考 一 冊 佛 教 史 田 中 浩 田

善 哉 大 考 也

○散策書肆と訪の一冊の唐書を得たり。
題名大、曰く擬寒山詩善し。松村居士
長守約、寒山の詩、儼然心する五律三万石
也。○家へ帰り、各師に伝わり、讀むと、詩
往々佳るるさるものあり、然るも每首韻味
を寓する不、一程の味あり、今試みて一冊を
揚出す

八月十日録

死生六大笑、休若夢中過、存者親因少
去、的穿月多、甚怪淵光路、進歩莫嗟
咤、這箇埋塵鏡、應須着力磨。
余擬寒山詩、亦是隨口出、也不期叶韻也
不中沿律、但欲勸世人、偶尔盈紙筆、若

徒炫耳目、視之有何益。

貪の蛾赴火、貪餌魚上釣、信人冷眼看、
不免笑爲笑、人本空於物、財色溺不好、
殺身了不顧、此物同一調。

若者未詳、其昔表紙云、貞享某年日
本人の題あり、時代推すべし。

杜城の良寛又寒山の詩、儼然心する、松村
の左の二律の如き、高寛の集の中に置るべし、人恐
く、非じ、
ん

山徑州苗、林廓扁白板、其深摘茶屋、
燒出炊飯晚、自人、無寸舌、天生得一懶、
從來不見人、何煩青白眼。

志化不能苦、形骸何足累、藜杖倚花前、
名牀横牀内、眠り即便行、夜睡即便
睡、女人有言、無事以事有者

我欲去打人、人亦来打了、我欲去打人、
人亦来罵了、却如自打罵、並不差毫眇、
... 昇来没便宜、不如忍耐好、

下道後、念心、詩六十字、得、閑、乘し
す、の、際、守、て、言、ある
とする也

○山陽研究の初を以つて從來文者の経緯を
耳し、母の三枝先たる、なり、如、め、て、初、来、り、
余山陽の墨蹟を出し、且つ山陽の史を以て

り又三枝の傳をも以て、三枝先以て世を以て研
究し、出づ、と、如、る、日、ち、の、史、の、初、を、と
一説し、なり、と、後、の、此、如、る、を、先、知、り、て、是、帝、中、以
幸の御三上卷次、山陽自平の如を以て、元、迄、
入る、て、世、の、事、を、も、の、人、も、を、ん、は、日、ち、
あり、が、女、の、方、の、山、陽、に、礎、を、以、つ、て、業
す、ん、の、或、を、立、者、の、著、る、を、ん、唯、に、山、陽、加、布
尊朱浪横、ん、其、故、終、り、と、山、陽、自、平、の
如を以て、支、坪、の、家、に、在、り、し、後、の、数、多、の、時、焼
去り、の、世、の、女、の、存、す、る、もの、副、を、に、在、る、を、き、と
三枝読る、を、以、つ、て、余、山、陽、自、平、
行を石秀翁記を出し、を、以、つ、て、三、枝、と、在、る、後

あ、北條天保三年中夏の移：錦三乃ち山陽後
前數十日前也。未比控するは違ふことと云ふも恐
く、山陽道移：逸し、文彦平をえん。石巻宿の
是根家志木侯正岡侯者、高也。此家南朝
楠廷尉の本高と云ふ、其の石巻の二公子を以て
名とする所次を石巻の石化し、其の移するの
ありし韓人の野の所と云ふ、此其のありし山
陽文中の詳也。此文を漢みたり、初めは氣
のつきと云ふ近の坊より得たる木活字本、丁
卯集（唐許渾用晦）と上版し、其人則ち此の
石巻宿の其人と云ふことと云ふ、丁卯集を出し
出す、巻首の石巻宿の印を刻し、大塚雲
撰

湯の序よりぬり、木侯上卿と云ふ、且つ
雲湯の題詞、天保乙未之夏、旅彦根宿、
と云ふ、以つて徴すべし、物き時に出し、
きよの歎、若し三枚の記合さく、此石巻宿の
書を出すことと云ふんば、丁卯集の書上梓
者、石巻宿を詳らぬ、初ること、
らん、石巻宿記を添名、名又也、殊に山陽
總節し、と云ふべきもの、
卯集又此書と係せ、
大正九年八月十九日誌
○客あり、来つて、詠次支那の骨董如何と問ふ、余曰く
支那も自身、即ち世界に於ける大骨董也、其の

古も其れよりして時代有るもの世に匹敵するものある
也然れども支那を以て骨董とす或は其系統と云
はん、更らる他の大骨董を考へん山東にある泰山
こそ支那切つその大骨董とせん此の大塊を海抜上
千尺と稱へん支那五嶽の宗と仰かぬ其の形勝の雄
偉なる其の巖石樹木の奇怪奇なる其の多量の神
碣を^①考へ其の帝者名賢の足跡の登攀の址を
存する支那三千年來の宗教の一日此の^②下集の中する
趣味ある神話傳説の多くこゝに存する支那を以てし
ても何物も乏れぬ故し得る者即ち支那の最古と知
るもの此山より支那歴代の興衰(変遷)を流るるの
此山より支那の文化の感化するところかし支

那三千年の思潮の^③推移あり、若し國藝
をいふは該を以て得しとせんやこゝに支那の大
國寶也然るに此の大骨董は山東省に作られたるを
以て之れと日本の勢力國內にあり、若し支那の大骨
董を何と云ひ泰山こそと吾れを考へんこゝ一矣す(八
月廿日記)

○而中より國考の^④海神の考證を流るる
了所考の^⑤唯此踏石録を本質居八年大坂
刊行の^⑥死後や流るる考を考へる所國史文
書に^⑦水滸漸を考へる考首に秋山玉山漢文の
序あり^⑧抄も也出入の考國史寸珍考書(冊)を
高く考へる栗里とせん人の詩書(冊)を考へる

へし、北人米山の精進、佐々木とあり、佐々木八十八歳とあり、
の難あり、未だ婚氏を置かざるなり、題後、中、明、法
六、七とあり、山の人の名、如、文、し、五、峯、の、城、人、の、城
を、捨、てる、も、無、し、且、く、寸、政、架、中、に、花、し、中、城、の
人、と、其、の、週、歴、を、測、ん、と、す、目、の、石、川、の、中、に、回、者、海
り、に、出、う、け、居、る、野、田、松、平、中、と、あり、今、朝、回、者
入、の、者、北、列、を、し、中、に、寸、政、本、六、行、を、し、心、經、寸
帖、一、豆、本、伊、勢、物、後、一、寸、珠、回、者、一、總、回、三、行、北、内
豆、本、伊、勢、物、後、寸、珠、寸、坊、寸、云、零、本、也、(上、下、二、冊
の、内、下、冊、を、只、く) 日、地、回、三、行、を、の、信、三、年、玄、々、集
の、銅、鶴、を、し、架、中、此、種、の、地、回、を、云、あり、玄、々、集
の、銅、板、架、中、未、だ、あ、り、と、も、也、 八月廿二日記

○其角の集をあり、く思ふ、其角の書、竹を漁り、年
少、い、五、元、集、一、部、を、得、を、う、其、角、の、集、を、抄、け、
故、下、其、角、白、也、こ、由、也、其、角、句、を、
自、筆、を、右、力、味、ある、と、云、ふ、五、元、集、く、し、回、五
句、と、あり、

雨後

あまのこも、草、生、え、ら、の、う、れ、を、よ、き、け、り

舟具

き、あ、か、花、け、る、力、を、き、き、え、ら、う、り

巴江

お、ろ、ろ、と、花、の、葉、白、く、峯、の、月

蚊もやくや寝衣ぬき、闇の秋夜

田家

汁粥の釜のしつらや早苗も

更衣

紙の居るときぬきくきやふも

尋衣

植木ののまきまき守し花いかに

惜花不掃地

家奴の居るる朝衣のまき

足踏をくまきく猫や雨のや

まき路まきまき

喜雨や葉の音も静かまの居る

無車馬喧

又の野町中まきまきことまき

傾城の寝るまきまき

行舟や何まきまきはるのまきの味

老子や何まきまき深あまの母のまき

背月面をまきまき

武市まきまき留寺まきまき

大かめまきまき

こまきまきの寝るまきまき

園博まきまき

いひなき三井の二王や冬木三

目けりうと氣まきし政中の浮世か

煙開や池をふりち金のころり

柳堂のたつか人をまきりえ

こゝろ春座をあらうく酒代を

山石の僧り

雪をぬり旅らふ旅をきかけり太山寺

雄掃と秋とねもあふあつらや

女中の昔いふと

草狩や桑のこころ歌めり

あまあつらひのこころ酒のこころ

山り

山犬と馬の奥出す雪あかき

又まら子守のこころ池の歌

真若画僧

あま喜しこころ家いそげおの解き

お大言者

人のこころやと念の家も祝う

あま喜めを築く増祝三

おれの誇りふとん七被さるん

由朝後志きつふ其の美を記し比中のひある、那海も
 昔四の天朝、敗れを皇位とせり之は、身とさう、
 那帝と其後崩し比か、皇位をせんうち後六十
 年七生き存らん、海烈るる世の夏遷をも元来、
 日下世紀以上のも直之厚く、目を、
 目のあきりえ比、まん年、徳ひも、
 采杭は表の帝り、帝り、ぬも、
 真逆おちり、古無つ比ひ、
 收を、
 大戦に收比、
 つ比も云く、
 ○此書の前、朝鮮の洗濯のことを録し比か、此氏

あら、
 元比、
 朝鮮の如く、
 こと、
 業の、
 着し比、
 り打つと、
 一と更、
 用、
 比、
 都部、
 共、
 持、
 比、

つたの、綿類の紡績術が通んじ、麻の糸類も夏時
の用に限ら、夏時も軟なる綿糸や絹糸を織るに
糸類が這々行つて、極まるまで、構えどまふこと
じんじ、く時田舎むと、袖を打つこと、日本を無
い朝鮮を留懐し、よるのひあるか、まの日本の
上代の状態もあるの、比、機をよん、未開のを授く、
さうある

○北京の新造艦動も、自分かゆつると、関もさ、初ま
つた、ま、い、く、北京に清を、と、居つた、此の、其、先を
名、さ、こと、も、出来、た、さ、さ、此、以、北、を、さ、さ、一、二、の、人、の、心
解、し、さ、の、所、を、い、は、は、日本に、使、使、も、初、の、日本、育
う、の、徐、村、錦、と、楊、震、あ、人、の、心、を、保、護、す、る、花、ひ、あ

つた、然、る、ん、英、佛、其、他、の、に、使、使、う、國、子、犯、使、入、の、ぬ、と
戸、を、開、た、の、ひ、皆、く、り、さ、い、な、使、使、と、投、す、る、投、す、さ、つ、た
と、さ、の、陸、宗、興、の、い、は、さ、さ、楊、震、あ、ひ、駭、き、さ、う、初、ま、さ、と、自
分の、賊、意、を、他人、の、名、義、に、お、り、行、く、天津、の、も、海、軍、在、に
お、り、け、た、さ、う、楊、震、の、居、る、と、自分、の、使、つ、た、的、の、家、の、合、を
を、催、し、た、の、ひ、其、の、家、の、梁、一、比、を、中、を、さ、さ、を、さ、さ、と、國、を、
つ、と、居、る、か、あ、り、か、敵、手、に、没、収、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
萬、世、寧、と、三、井、洋、行、に、身、を、寄、せ、し、居、る、と、さ、の、あ、あ、
さ、
ら、り、ま、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
支、那、の、軍、隊、や、英、法、と、さ、使、使、を、遠、提、き、る、の、國、人、の
心、を、衛、し、て、お、り、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
お、り、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
い、こ、と、を、日本、に、使、使、

二枚しに西々の留を二テカ〜又張る由〜是れを三
外人相書を略信に就るをいふなり〜右の味を
考ふるに比

○吳江存の遺の遺印二款あり吳江画冊丁珍帳
を獲る吳江の遺印ハ前月十二款と得る此の



擬胡斯禮
之草書
海道人解



吳江先生收心
弟六淵仿泮

辛巳才身
墨上石印
大



三顆（共）
三顆（各）
各印の傍に記す

画冊の卷首に本号
の名字あり曰く

東屋移地軸

丁丑夏の書為松原

新巻帳

馬峰正の案

画の総数十七枚の
今も程も吳江の
手紙の面に
ある

此の心貴女に不慮を以て函敷を賜ふらるは内由也

(二月廿五日記)

○廿廿日大隈侯の御返と聽きし事この日この日四日
人並に行く、ある言前日見え、駐在あるをさうさうお澄
下の天候を伺ひて見え、由事夜者の見えこの例の御
部におおの痛あり、その物、氣あふ傳ふたさ
おあり見よ言けはんとも、能うの御返と二時百に
深りたり、今うらと伝へ、閑父侯と母と三雙洞
さう所あり、古が教ををし、閑父の關係に就て侯
の向く候も教をの死に以て的うも、自ら其私弟を以
めし、節洞せうん、且の遺骸を指し、別在と華井ら
九とう、實に果敷也と語り、徳川十代將軍家齊

(大隈子)の思の御返と伺ひて、さうこの日、この日、閑父を

ある候、閑父の御返と伺ひて、さうこの日、この日、閑父を
男子があらうたさう夫人の大抵、候にあり、此の思の
に對し、傳へ、お物お愛さ、あらうた、さうこの日、夫人の時
に、思の思心をさう、或る時、おま、二番、おを、賞つ、
と、胸へ、さう、持参を、さう、あらうた、さう、年上、おの、
幸抱り、出来、さう、と、さう、お、笑つ、さ、福を、運利、ゆ、代、
移す、候、思、足利、七、八、負、之、に、困つ、に、義、政、ゆ、心、の、
年、閑、守、ら、む、お、實、を、お、稱、あり、さ、の、お、あり、さ、の、
お、無、の、に、候、お、あり、さ、の、お、あり、さ、の、お、あり、さ、の、
来、此、の、の、さ、の、い、お、あり、さ、の、お、あり、さ、の、お、あり、
ひ、から、さ、け、さ、の、お、あり、さ、の、お、あり、さ、の、お、あり、
さ、の、お、あり、さ、の、お、あり、さ、の、お、あり、さ、の、お、あり、

燈る物をせぬんちりぬ、東山殿を感えて御地を
つと内証の欠乏を補つに、自分もさうも支那の天子に
御し義政の医程を取つたの事何れも賢く
おとぼけをえ張る如才まの心ある、詞を卑くして多
く物を貴つた神々、~~書~~全作あるツルイ事
を誰れも巻講した女の、孝宗圓の其他の坊さ
人達もさうして下へ置けまの大概の事、此等
の事やりと皆其の帷幕に巻く、此女の心ある
るに語らる、侯の語録とゆるさるるし(廿五日)
侯と話次自分が朝鮮へ遊び宮殿内へ上
じトミを乞ふことを、御前の目も、右建業
又同じ女の、あるのを、朝鮮へ倣つた女の

れとらる、侯も左の如く語らる
惟新田この頃大官ら目を定めて御前にお
直する、ことあるてみる、自分も瑞ある、
此ことある、親念あるをも出し、さうして
御地を、あつたもの、或る時刻、さうして
ニコラシヒ平を、編んで、あつた、
と、又、修りして、修る、誰うん、
子の御寝を、敷く、の、あつた、
ア、ゲ、シトミ、を、
平、し、る、あ、ま、ん、を、外、し、る、戸、を、お、う、す、の、
ひ、あ、ま、を、
ひ、あ、ま、を、
ひ、あ、ま、を、

侯亦徳川氏を祀祀と書ふることを禁めしと云へ
る。自合らるるそのんを何故と問ふに、影を
人間と強て見せし道なり。其の代の遺
影にあり。徳川氏を平和を祈りつたの
影に、敵玉の遺影をぬきしを欲せしが、之
を禁めしとのある。唯、清正丈を長い百
しと来れ女のを去るる思ひぬと云ふれば、
物に除めを許さんは、非礼及を法に
入歸しと云ふの影あり。自合らるる影に
くもとうと甘く育むぬと笑ひんた
侯又七の増進にあり。御影に者うりきあるを口
と云ふてあり。多分ク口ス。うりきあると云
十二(影)

ひあううと云ひる

八月廿六日古地素三寸珍帖を高らし有る。巻首
に草子湯船山の望忘の題あり。素三寸
口湯山山あり。全部(十七枚)山あり。湯山初の
高きあり。各頁精を極む。珍とすべし
の巻に及あり。各頁精を極む。珍とすべし
○ 帖末湯山の落款あり。一葉紙質同し。う
り書と厚紙あり。或る巻末毀損し。改作心
の後、湯山に落款と云ふ。補へしと云ふ
似たり
○ 周に乘りし蓮坡詩話を後述、今心つた一二を録
す。
八月廿七日

長貧知米價克健海山名

逸作名

美人自古如名將不許人間見白歌

三

海山平陸之負公有上律四首詠烟草若今第錄

其一

神農不及見持物或曾受似吐仙竈火初疑
異名薑充腸無滓濁出口有氤氳明致
偏打憶禁喉一乃未雲

吳祥來西域流傳入漢家解人無藉酒款客
未輸茶葉合名承露囊應難辟邪間未
頻吐納提衛比卷初霞

細男通呼吸微噎一縷烟味從無味得情定
有坊牽蓋氣馳朝雨霧清心却畫眠誰知

飲食外別有去中微

清氣滌昏慙持葉任咀含吸靈能化實苦
有似甘燻火寒能印長吁意似酣良宵寐
寔藉雨助高淡

壽詩新在元小一首曰

祝翁不效華封祝市壽多男為已全
似款有花有酒長好花酒傲神仙

朱子常中丞綱之句云畏日看鋪長草思凡去
福屏去字極自然

吳江顧再主卓有少句即子詩云

愛聽松竹入翠屏微寺門不掩任雲飛克俗
見客渾無語笑向蒼翁自晒衣

牧市多魚戲華渠有及東坡沈次詩云

坡公養子怕聽我，我被癡歌誤一生。還願生兒
保且巧，鑽天鷲地到公卿。

越僧素畫於沈石田，寄一詩云：

寄將一幅刺溪藤，江面青山畫幾層。筆到斷崖
泉落處，石色添箇看雲僧。

崑山顧俠君，題飲大人憩杖雲根圖云：

櫻鞋若望水邊行，魚鳥知君拄杖聲。莫占前山
一片石，添余同坐看雲生。

不減前時風改

錢振登，天上有星，臨薄命，人間無藥治相思之
回為世傳誦，而半村無藥可消衰，鬢白有絲難與

淚珠紅，其感時傷過，連楚倍之。

朱竹垞聖谿詩云：

鳥驚山月落，樹靜松風緩。法鼓響空林，已有山僧
飯。

張少廷尉，任長蘆運使時，余至其小齋，見廷尉手書

軍幅粘壁間云：

書畫琴棋詩酒花，當年件件不離他。而今七事
都更變，柴米油盐醬醋茶。

眼常為余言古人歌謠，出於天然，故如近日楚中小兒求雨，謠
頌好云：

青龍頸白龍尾，小兒求雨天歛耳。大雨落在田
隴中，小雨落在花園裏。

未嘗不可播之樂府也

淡丰村四龍 誓墓不得志 往來之詩 既問以酒自娛

不終也 隔有人送春詩云

送春詩到 獨春非我 獨居荆棘園 杜宇亦知人意 苦 陽燄高呼不如歸

佳句一二

吟到梅老連月冷 話深燈火入灰微 青崖

事雖千局 妾心共一炊 的文燈

與君南北馬牛負 一笑因逃世網中 秋谷

欲逃世網無多法 莫道詩名萬口傳 初白

陳其年揚州紅橋之詩云

輕紅橋上上遊巡 綠水微波漸心鱗 手把柳絲

無一語 十年春恨細如塵

刁似垂柳鴨頭綠 口唇吳天血色紅 絕

似儂家罨畫裏 或屬春水或屬風

雲山徐芬若 尚詩格雄健 極為渾厚 所稱贊 有書

云居庸關詩云

將軍北去 封侯士卒 心皆逐 留馬後 拋戈

馬前 官去 關中 得不回頭

不惟句一二也

東徐東癡詩云

今年春冷 候常賒 野曠鳥啼日 又斜 寒在清

都已過 墓田 撥亂 野棠 花

又轉城詩云

来着東凡草柳條、土膏新軟雪全消、轉成三面無
相識、黃葉隨人過板橋

○上野、然狂來訪、一掃去と野々、展てこゝを又んば
余ら菩提寺の墓地にある余一族本末の墓碑の
一部分を掘し、そのものまで、いまだ家こをせざる
下、欣然之れと云々、

金葉市宛 扱出、家古

白雪先生 録考、横文

市島子協 扱考、扱り

萬術市治系 扱考、

青井忠信 惟考、録

印守、田府君

○森川市宛の浪系帳、後名之部二冊、竹内治君
〜將之、之、初扱、之、取紙、扱、之、後、余、往、浪
系帳、五冊、之、函、之、而、之、後、名、帳、と、謝、之、

丸を併せん、如のえ完、解を、切、之、八月、林、た、口

北帳中、各名氏として、著者、を、之、さ、る、ゆ、の
類、あり、後、の、御、免、之、を、誰、と、言、ま
り、ある、を、た、と、ある、を、

上野考

あもえの、あま、

依、理、の、

き、の、あ、つ、て、云、

浪、系、帳、之、

つ、て、云、

い、を、さ、る、と、云、

少、の、を、さ、る、と、云、

こ、を、さ、る、と、云、

浪、系、帳、之、

竹、之、を、さ、る、と、云、

紀、之、を、さ、る、と、云、

志、之、を、さ、る、と、云、

浪、系、帳、

おつくくのこ
まつまきあふ
鈴まのたまこ

并蓮花の
源俊頼
あまのまこ

このまき

以上十四首

以下十五首

源吉

以上廿八首

源珠山主脚之

俊頼頼良

出ることつら

以下廿首

光俊朝臣

うるえとのこ

以下廿四首

字号夜王

右下等以上るこ十一首元暦常事おき

かよとのまつとも

依理心

此年北代の墨跡ゆき

右等の極めをも 形とよむものめいさ
以上を名氏とちんくたる右等とて後ひき
うあま今の初高に四一とあはるべきや
○町淡子の方仲頼を伝を 新花橋を見よ
こんと甘を村吹年白あまの句集に 姓に別書
支(補)淡彩を施しあう 告尾に月溪の跋あり
えぬをらんま今も安ふと得難し 價をのんば
書冊五十四とまの 贈らあはれうへ、 後まをるの
山田に復むをすくむ、 八月ある記

閱覽室

十二
卷

